源氏物語　帚木の巻の本文の性格と系統

岩下光雄

1

本稿は、「源氏物語　桐壺の巻の本文と物語の享受」に続く帚木の巻についての調査、研究である。前稿に対する先学からのご教示をふまえ、補訂を加えながら、本文の性格と系統などについて再検討し、従来の考え方に対していささか批判を試みたいと考えている。

青表紙本系統の大島本に対する尾州家河内本の異文が、別本系統の諸本の異文とどのような関係にあるか、また、別本系統の異文相互の関係がどのようになっているかを、手沢本の頁ごとに明かにしながら、本文の系統、性格を分析していくことにする。分類の基準は次のごとくである。

第一類　河内本の独自異文

第二類　河内本の異文が別本諸本と共通する異文

第三類　河内本の異文が別本諸本とほぼ共通する異文

第四類　別本諸本の一本のみが有する独自異文

第五類　別本諸本の間で共通する異文

第六類　別本諸本の間でほぼ共通する異文

武蔵野書院の『校注　源氏物語』（永井和子校注）を底本に、秋山虔・池田利夫両氏の編になる『尾州家河内本源氏物語』（武蔵野書院）、思文閣出版　陽明叢書『源氏物語』、『源氏物語大成』などの本文によって校合を加えた筆者の手沢本の三頁分⑤頁から⑦頁までの異文を調査した結果を例示する。各項の頭書きの算用数字は、手沢本の頁数、最初に示す本文は手沢本の底本の本文であるが、第三類だけは河内本の本文を最初に示した。諸本の略称は『源氏物語大成』によった。

第一類

⑥すきずきしさなどは――すき・⑥御心に――ナシ・⑥おほ殿――おほい殿・

⑦好きがましき――世にすきかましき・⑦諸共にして――ナシ・

第二類

⑤語り伝へけん――語り伝へたる　陽、国・⑤いたく――いたう　陽・⑤程――程に　陽、国・⑤事は――ところ　陽・

⑥なにくれと――なにくれを　陽、国・⑥さまに――さまにと　陽・⑥給ひつつ――給　陽、国・⑥宿直所に――宿直所の　陽、国・

⑦馴馴しくふるまひたり――物馴れきこえたまへり　国・⑦思ふこと――思ふことを　陽、国・

第三類

⑥あらさりけりうちみたれ――あらさりけりおほかた　陽・あらさりけりおほかたうちみたれ　国・

第四類

⑤光源氏――光源氏の　陽・⑤多かなる――多かめる　陽・多かる中　国・⑤いとど――いととしく　国・⑤人の物言ひさがな――人のくちかろ　陽・くちさかな　国・⑤事は――ことも　国・⑤は笑はれ――くらへられ　国・

⑥ようし――よくし　陽・すくし　国・⑥稀には――稀に　国・⑥御心に――御心にも　国・⑥さし――ひころ　国・⑥給ふを――給けるほと　国・⑥よろづの――ナシ　国・⑥めづらしき――めつらしくおもたゝしき　国・⑥調じ――し　国・⑥御むすこ――子　陽・⑥御むすこの君たちただ――御君たちただ　国・⑥親しく――親しう　陽・

⑦人よりは――人より　陽・⑦心やすく――やすらかに　国・⑦いたはり――いたはしかり　陽・⑦すみかはこの君もいと物憂くして好きがましき――物にうちしてよにもにるましき　国・⑦好きがましき――いと好きかましき　陽・⑦しつらひ――しつらひを　国・⑦君の――この君の　国・⑦し給ふに――給ふ時は　国・⑦聞え――いて　国・⑦遊び――遊ひわさ　陽・遊ひくさ　国・⑦まつはれ――まとはれ　陽・⑦聞え給――聞え給つる　国・⑦かしこまり――かしこまりを　国・⑦心のうち――心中　陽・⑦むつれ――むつひ　国・⑦にも――に　国・⑦人ずくなに――人さふらはす　国・

第五類

⑤ことぐしう――ことくしと　陽、国・⑤ものし給ひし時――をはせしころをひ　陽、国・

⑥長雨――長雨の　陽、国・⑥恨めしく――恨めしと　陽、国・

⑦のどやか――のどか　陽、国・

第六類

⑤世にも――世に人　陽・世にも人　国・

河内本の独自異文は五例で、青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・国・7（1）　(ロ)陽・3　(ハ)国・1

（　）内はほぼ共通する異文で、上の数に対する内訳を示す。算用数字は異文例の数である。以下の記述もこれに従う。

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・10（1）　国・8（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十六例中、別本諸本と共通するものは十一例で、共通異文率は六八・八％である。異文総数に対する陽明文庫本の共通異文率は六二・五％、国冬本は五〇％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、陽、九〇・九％、国、七二・七％に達する。これによれば、河内本は別本系統の陽明文庫本に最も近親性を示してはいるが、なお国冬本とも無関係ではないと考えるべきである。これを系統論的性格第一とする。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・26　陽・12

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二倍強（二・一七倍）に達する。これを系統論的性格第二とする。

次に、別本諸本の間で共通する異文と、ほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・6（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二三・一％であるが、陽明文庫本のそれは五〇％に達する。これによれば、国冬本の共通異文率は陽明文庫本の共通異文率の二分の一以下である。これを系統論的性格第三とする。

このような系統論的性格、あるいはこれとは別の系統論的性格が、帚木の巻の一帖全体または一帖の一群の物語に亘って指摘することができるとすれば、本文系統論の上で重大な問題を示唆することになる。これを資料番号「0」とし、以下手沢本の頁を追って二頁分ずつ異文を分類、集計しながら検討を加えていくことにする。

⑧・⑨　河内本の独自異文は九例で、青表紙本に対する河内本の独自異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料1」）

(イ)国・5（1）・　(ロ)陽・2・

共通異文の中には、別本が複数の形で共通異文を形成するものはなく、河内本の独自異文数が別本との共通異文数を上まわっている。こうした傾向は資料番号0で指摘した性格と全く異るばかりか、桐壺巻でも全く見ることのできなかった傾向である。河内本の異文総数十六例中、別本諸本と共通するものは七例に過ぎず、共通異文率は四三・八％に過ぎない。国冬本の異文総数に対する共通異文率は三一・三％、陽明文庫本は一二・五％である。共通異文数に対する諸本の近親度も、国冬本七一・四％、陽明文庫本二八・六％と非常に低い。国冬本が河内本に最も近い。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・24　　陽・11

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の独自異文の二倍強（二・一八倍）に達し、系統論的性格第二については「資料0番」と変らない。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・3（2）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は一二・五％、陽明文庫本のそれは二七・三％である。両本は系統論的性格第三の百分率を逆転させている。

「資料　1」の分析と集計によれば、「資料　0」の系統論的性格は、その第二だけが共通するに過ぎない。そして、その根底には、河内本と別本との共通異文が少なく、別本諸本間での共通異文も極めて少ないという事実が深くかかわっているように思われる。そして、同時に諸本間の本文異同も極めて少ないことが特徴である。

⑩・⑪　河内本の独自異文は七例で、青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料2」）

(イ)陽・国・1　　(ロ)国・4　　(ハ)陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・5　　陽・3

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十四例中、別本諸本と共通するものは七例で、共通異文率は五〇％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は三五・七％、陽明文庫本は二一・四％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七一・四％、陽明文庫本四二・九％である。これによれば、河内本は別本系統の国冬本に最も近親性を示しているが、陽明文庫本とも無関係ではないと考えるべきである。系統論的性格第一は、両本の位置を逆転させて成り立っている。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・24　　陽・6

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の四倍に達する。系統論的性格第二の異文比率の二倍となっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・10（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は四一・七%、陽明文庫本のそれは一六六・七%に達し、陽明文庫本の独自異文の数は、六例に過ぎない。

「資料　2」の示す事実はきわめて重大である。陽明文庫本の異文の多くは国冬本の異文と重なり、一例が河内本に、一例が国冬本と河内本にという形で重っている。「資料」第一類にあげた「⑩心をやりて」に続く「われかしこにうち思ひて」の河内本の独自異文は、陽明文庫本では「思ひて」となっているが、国冬本は「おのがじし心をやりて」の上に「われからこころにうちおもひて」とある。独自異文として扱ったが、河内本と国冬本とは密接な関係をもっている。そのことは、「資料　2」のそれに次ぐ異文　「⑪さばかりならん」が、河内本、国冬本の両本に、「しかなりなん」となっていることからも考えられる。阿部秋生博士（陽明叢書『源氏物語　一　飜刻・解説』思文閣出版）の、「青表紙本・河内本とこの本文とでは、文章の性格に違っているところがあるように思われる。」（111頁）「陽明文庫本と青表紙本・河内本それぞれの距りは似たようなものである。青表紙本と河内本との距りも似たようなものである。」（105頁）「陽明文庫本の本文は、青表紙本や河内本を操作して作りうる本文ではない」（106頁）という考え方は、この資料をもとにする限り、絶対に成り立ち得ないのである。

⑫・⑬　河内本の独自異文は九例で、青表紙本に対する河内本の異文十三例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料3」）

(イ)国・7（2）　(ロ)陽・3　(ハ)国・陽・3（1）

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・10（3）　陽・6（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数二十二例中、別本諸本と共通するものは十三例で、共通異文率は五九・一％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は四五・五％、陽明文庫本は二七・三％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七六・九％、陽明文庫本四六・二％である。系統論的性格第一は、ここでも両本の位置を逆転させて成立している。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・30（1）　陽・9（1）

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の三倍強（三・三倍）に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・2（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は六・七％、陽明文庫本のそれは二二・二％で、国冬本の共通異文率は陽明文庫本の共通異文率の二分の一以下であるが、その率が極めて低いことが特徴である。比較的長文の異文三例は、河内本と国冬本に重なるもの二例、河内本と国冬本、陽明文庫本に重なるもの一例であるが、陽明文庫本の異文が非常に少ないことは「資料　2」と同様である。

⑭・⑮　河内本の独自異文は七例で、青表紙本に対する河内本の異文十例は別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料4」）

(イ)陽・国・4　(ロ)陽・3　(ハ)国・3（1）

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・7　　国・7（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十七例中、別本諸本と共通するものは十例で、共通異文率は五八・八％である。陽明文庫本・国冬本の、異文総数に対する共通異文率は、四一・二％である。共通異文数に対する陽明文庫本・国冬本の近親度は七〇％である。これによれば、陽明文庫本と国冬本は河内本と等距離に存在することになるが、比較的長文の河内本の異文「ためしとも」「ことなる事なく」などは、国冬本と共通異文を形成している。しかも、陽明文庫本には「かしつきたる人の」「うちこもれらん」など、比較的長文の独自異文も存在する。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・33　　陽・13

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二・五倍強（二・五四倍）に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

陽・国・3（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は六・一％、陽明文庫本のそれは二三・一％で、「資料　3」とその比率はほとんど変らない。この部分も、国冬本を除くと比較的本文異同の少ない部分である。

⑯・⑰　河内本の独自異文は十三例で、青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　5」）

(イ)国・5（3）　　(ロ)陽・1（1）　　(ハ)国・陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・6（3）　陽・2（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数二十例中、別本諸本と共通するものは七例に過ぎず、共通異文率は五三・八％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は三〇％、陽明文庫本は一〇％に過ぎない。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八五・七％、陽明文庫本二八・六％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・24　陽・11

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二倍強（二・一八倍）に達する。系統論的性格第二には矛盾しない。ところが、陽明文庫本の異文は十一例であるが、その異文はほとんど語の形で、きわめて片々たるものに過ぎない。国冬本の異文もこれに準じる。これと呼応するように、両本に共通する異文、ほぼ共通する異文例は全く存在しない。これに対して、河内本と国冬本との間には、かなり長文の異文を含めて共通異文が存在する。そして、また、河内本の独自異文も若干見られる。この事実は、本文系統論の上で重大な問題を示唆しているように思われるが、これらの問題は、「資料　7」あたりに顕著にあらわれてくる国冬本の長文の異文の存在とともに、巻全体の異文を集計、分析していくなかで検討を加えていくことにする。

⑱・⑲　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　6」）

(イ)国・陽　1〈陽・1〉・　(ロ)国　3（2）　(ハ)陽　2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・4（2）　陽・3（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数九例中、別本諸本と共通するものは六例で、共通異文率は六六・七％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は四四・四％、陽明文庫本は三三・三％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本六六・七％、陽明文庫本五〇％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・28　　陽・11

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二倍強（二・五五倍）に達し、系統論的性格第二と一致する。「資料　5」と同じように、河内本、別本の本文異同はきわめて少なく、別本間で共通する異文が一例あるにとどまる。国冬本の独自異文数に対する共通異文率は三・六％、陽明文庫本のそれは九・一％にとどまる。系統論的性格第三の比率はともかくとしても、共通異文率の非常に低いところに問題がある。しかし、こういう点は、その本文系統を考えていく上できわめて示唆的であることを考慮すべきである。

⑳・㉑　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　7」）

(イ)陽・国・3（1）　　(ロ)国・2　　(ハ)陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・5（1）　　国・5（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十例中、別本諸本と共通するものは七例で、共通異文率は七〇％である。陽明文庫本・国冬本の異文総数に対する共通異文率は五〇％である。共通異文数に対する両本の近親度は、七一・四％に達する。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・35　　陽・12

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二・九二倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・3

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は八・六%、陽明文庫本のそれは二五%であるが、「資料　6」で指摘したごとく、系統論的性格第三にかかわる比率よりも、共通異文率の非常に低い点に問題がある。更に「資料　7」には注意しなければならない問題がある。第五類の四例がことごとく⑳頁に集中し、河内本の異文数の十例中八例、八〇%がやはり⑳頁に偏在している。そればかりか、本文の異同が極端に少ないのに、国冬本には一行以上に亘る異文一例、半行に亘る異文三例が、逆に㉑頁に集中してあらわれてくる。これまでの資料に見られなかった、これらの相関的事実は、偶然の符合であるとは考え難い。やはり、全体的な資料の集計と分析のなかで考えていかなければならないが、本文系統論の上で、決定的な問題を示唆しているようにも思われる。

㉒・㉓　河内本の独自異文は八例で、青表紙本に対する河内本の異文十三例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　8」）

(イ)国・11　　(ロ)国・陽・1　　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・12　　陽・2

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数二十一例中、別本諸本と共通するものは十三例で、共通異文率は六

一・九%に過ぎない。国冬本の異文総数に対する共通異文率は五七・一%であるのに対して、陽明文庫本は九・五%にとどまる。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本九二・三%、陽明文庫本九・五%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・41　　陽・14

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の三倍弱（二・九三倍）に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文はなく、ほぼ共通する異文は一例に過ぎない。国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二・四%、陽明文庫本のそれは七・一%である。「資料　7」で指摘したごとく、両本の共通異文率は非常に低い。しかも陽明文庫本の青表紙本に対する異文が非常に少ない傾向も似ている。半行に亘る国冬本の独自異文も三例ほど見られる。独自異文という視点からすれば、陽明文庫本は別本にも河内本にも近くはなく、青表紙本に最も近い。そして、国冬本は河内本に最も近い。こうした事実は、

(イ)河内本から国冬本が派生した。

(ロ)国冬本の原形を中心に河内本が形成された。但しこのことは二十数本を以って校合した河内本の成立過程を否定する意味においてではない。

(ハ)国冬本・河内本が同一またはほぼ同一の原形から形成された。

などの本文系統的関係を想定し得るように思う。しかし、これらの関係は全資料の検討を通して考えるべきであり、こうした関係が、巻全体ではなく、群の形であらわれてくることの意味についても再検討を加うべきもののように思われる。これらは、『源氏物語大成』に対する最近の評価に対しても示唆するところが多いように考える。

㉔・㉕　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異

文を形成する。（「資料　9」）

(イ)国・5（1）　(ロ)陽・2

共通異文の中には、別本が複数の形で共通異文を形成するものはない。河内本の異文総数十例中、別本諸本と共通する異文は七例で、共通異文率は七〇％に達する。国冬本の異文総数に対する共通異文率は五〇％、陽明文庫本は二〇％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七一・四％、陽明文庫本二八・六％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・31　陽・10

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の三・一倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・4

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は一二・九％、陽明文庫本のそれは四〇％で、系統論的性格第三にかかわるものとしては、国冬本の共通異文率は陽明文庫本のそれと比較すると三分の一以下である。

青表紙本に対する河内本、陽明文庫本の異文数は十例で同数となっているが、陽明文庫本には一行に亘る脱文が見られる。その脱文に続く異文は「やかて相添ひて」と、国冬本との共通異文「やかて」の語をもつ。このことは両本の近親関係を示しているように見えるが、その関係はやはり断片的、断続的であり、この一行の異文を除くと、陽明文庫本の異文はすべて語の形であらわれる。こういう視点からすれば、陽明文庫本は河内本よりも青表紙本に最も近い本文であるということができる。国冬本には文の形であらわれる独自異文もかなり多く見られるが、第三類に分類した㉕の異文は、河内本と国冬本との近親関係を積極的に示すものだと考えられる。また、第一類、第四類として、

それぞれの独自異文として処理した「㉕心やすく」には、「おほとかに見はなつ」の共通異文が見られ、青表紙本、陽明文庫本などでは、数語前にある「見放ち」の語がなく、この部分に移っている。さらに、国冬本の七〇%を超える河内本との近親度を考慮すると、国冬本の三十一例に及ぶ独自異文をどう考えていくかはしばらく棚上げするとすれば、両本の関係は、かなり密接であった時点が存在したはずだと想定せざるを得ない。

㉖・㉗　河内本の独自異文は五例で、青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　10」）

(イ)国・陽・6（1）　(ロ)国・3　(ハ)陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・9（1）　陽・8（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十六例中、別本諸本と共通するものは十一例で、共通異文率は六八・八%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は五六・三%、陽明文庫本は五〇%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八一・八%、陽明文庫本七二・七%に達する。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・22　陽・13

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・六九倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・2

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は九・一%、陽明文庫本のそれは一五・四%である。「資料　10」に見られ

る傾向には、かなり特徴的な事実が見られる。国冬本に二行と一行に亘る長文の異文が見られるが、二行に亘る異文の他は、ほとんどが文の省略化、簡略化、言い換えという形であらわれていることである。「資料　9」と比較すると、手沢本に書き加えられている国冬本の異文は少ない。それと共に、河内本と共通する別本の異文が多くあらわれ、第三類㉗に分類したような長文の、ほぼ共通する異文が見られるようになる。このことは、陽明文庫本の性格にも波及しているように思われる。青表紙本対河内本・別本という性格が顕著にあらわれ、別本系統に一括されている陽明文庫本の位相が明確にされる。こうした資料による本文系統的性格の不整をどう解釈するかは、全体の資料の分析を通してなされなければならないが、やはり重要な問題として考えておかなければならないことのように思われる。

㉘・㉙　河内本の独自異文は九例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　11」）

(イ)陽・6（1）　(ロ)陽・国・3（1）　(ハ)国・3（陽・2）

(ハ)の「(陽・2)」は、河内本と共通異文を形成する三例中、二例が陽明文庫本とほぼ共通する異文であることを示す。河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・11（4）　国・6（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数二十一例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は五七・一％である。陽明文庫本の異文総数に対する共通異文率は、五二・四％、国冬本は二八・六％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、陽明文庫本九一・七％、国冬本五〇％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・39　陽・13

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の三倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

陽・国・3（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は七・七%、陽明文庫本のそれは二三・一%である。底本㉙「得頼むまじく」は、他の青表紙本、陽明文庫本、河内本に「え得頼むましく」とあるので、河内本の異文とはしないで除外した。「資料　11」に見られる特徴は、「資料　0」で系統論的性格第一として指摘したように、河内本に最も近いのは陽明文庫本で、近親度は九一・七%に達し、「資料　10」で示しはじめていた傾向を明確にした点である。国冬本の独自異文には、簡略化、言い換えや解釈的本文の他に、文意の通じない部分を無理に通そうとする努力や曲折のままを残している本文も見られる。陽明文庫本は河内本に最も近いが、国冬本とも無関係でないことは、両本の共通異文として示した第五、六類の異文の存在によって明かである。

㉚・㉛　河内本の独自異文は八例で、青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　12」）

(イ)国・5　　(ロ)陽・2

これによれば、河内本の異文総数十五例中、別本諸本と共通するものは七例で、共通異文率は四六・七%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は三三・三%、陽明文庫本は一三・三%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七一・四%、陽明文庫本二八・六%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・20　　国・13

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・五四倍と逆転している。ただその異文は簡略化、言い換えなど語の形であらわれるものがほとんどであるが、㉛には二行半に亘る国冬本の長文の異文が見られる。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

陽・国・8

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は四〇%、国冬本のそれは六一・五%である。

「資料　12」に見られる特徴は、既に指摘した㉛の二行半に亘る長文の異文の存在であるが、青表紙本、河内本、陽明文庫本に対して国冬本の異文は、比較的句の位置を整理し文意を通じるような苦心の跡が見られる。しかし、この異文を如何に細分化して処理しても別の資料で指摘してきたように、国冬本の異文が陽明文庫本の異文数の二、三倍という実態をつくり出すことは困難である。やはり、資料の特徴的事実として考えておかなければならないことである。そして、ほとんどが語の形であらわれているが、陽明文庫本と国冬本との共通異文が八例と目につく。国冬本の異文の減少が顕著であることと無関係ではなさそうである。異例な長文のほかは、一般的には本文異同の減少化の傾向が示しはじめられているように思われる。

㉜・㉝　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　13」）

(イ)国・5　　(ロ)陽・国・(1)

これによれば、河内本の異文総数九例中、別本諸本と共通するものは六例で、共通異文率は六六・七%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は六六・七%、陽明文庫本は一一・一%である。共通異文数に対する諸本の近親度は国冬本一〇〇%、陽明文庫本一六・七%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・20　　陽・12

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・六七倍で、「資料　12」とは再び逆転の現象が見られる。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二五％、陽明文庫本のそれは四一・七％である。

「資料　13」に見られる特徴は、河内本の異文が九例と極端に減少し、陽明文庫本、国冬本の異文も片々たる語の形であらわれるものがほとんどで、諸本間の異文の最も少ない部分である。このような現象をどのように説明すべきであろうか。やはり、全体の資料の総合と分析を通して考えられなければならないことではあるが、本文系統論の上で注意しなければならないことのように思われる。片々たる異文のなかで、「手を折りて」の歌には二例の河内本の独自異文が見られるが、諸注が指摘するように伊勢物語十六段の歌をふまえたものであり、享受とのかかわりの中でやはり注意しなければならないことのように思う。

㉞・㉟　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文十六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　14」）

(イ)国・陽・8　　(ロ)国・7　　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・15　　陽・9

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十九例中、別本諸本と共通するものは十六例で、共通異文率は八四

・二％に達する。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七八・九％、陽明文庫本は四七・四％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本九三・八％、陽明文庫本五六・三％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・9　　陽・7

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・二九倍に過ぎない。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・3（2）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は三三・三％、陽明文庫本のそれは四二・九％である。

「資料　14」に見られる特徴は、系統論的性格第一から第三に至るまでそのすべてを否定していることである。こうした顕著な傾向は、しかし明確な一つの事実を示している。それは、国冬本が河内本そのものとほとんど同一の本文であるという厳然たる事実であり、陽明文庫本とも非常に近い本文を有しているという事実である。更に仔細に検討を加えていくと、河内本、国冬本、陽明文庫という両側の皮に、河内本、国冬本という餡がつめられた形になっている。青表紙本対河内本、別本という本文の対立が明確になされ、しかも、河内本と国冬本がほとんど同一の本文であるという事実をどのように考えるべきかは、やはり全資料の総合と分析とを通してなされなければならないが、この部分にあらわれたきわめて特徴的な傾向として注意しなければならない。

㊱・㊲　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　15」）

(イ)国・7（陽・2）　(ロ)国・陽・4　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・11　　陽・7（2）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十五例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は八〇％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七三・三％、陽明文庫本は四六・七％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本九一・七％、陽明文庫本五八・三％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・18　　国・11

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・六四倍と逆転している。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は二七・八％、国冬本のそれは四五・五％である。

「資料　15」に見られる特徴は、四行に亘る陽明文庫本の脱文とも見える異文が存在することである。だがそれは単なる「誤脱又は不審な異文」とも考えられない点がある。確かに陽明文庫本一本にのみ存する異文であることは、誤脱説に有力な根拠を与えることになるが、反面かなり意図的に文意を通そうとする苦心の跡も見られるように思われる。資料の前半は、河内本の異文と国冬本の本文との一致が見られ、後半には国冬本・陽明文庫本と河内本との一致が顕著にあらわれ、国冬本と陽明文庫本との共通異文が連続して見られる。第五類の用例が、㊲頁に集中的にあらわれていることは注意すべきことである。こういう点に視点を置くと、やはり青表紙本対河内本・別本という対立関係を考えていくことができるが、そうした問題とは別に、河内本・国冬本、陽明文庫本という関係が深まる中で、国

冬本と陽明文庫本という関係も深くかかわっていくという事実を、やはり注意してみていかなければならないように思う。

㊳・㊴　河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　16」）

(イ)国・7〈陽・1〉　(ロ)国・陽・4

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・11　　陽・5（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十五例中、別本諸本と共通するものは十一例で、共通異文率は七三・三％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七三・三％、陽明文庫本は三三・三％である。

共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇％、陽明文庫本四五・五％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・14　　国・7

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の二倍となり、系統論的性格第二は両本の位置を完全に逆転させている。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・4（1）

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は二八・六％、国冬本のそれは五七・一％である。

「資料　16」に見られる特徴は、前半と後半の資料でかなり異る傾向が見られることである。前半は「資料　15」の前・後半部を混交し、河内本の異文も一行に亘るものや語句の形であらわれるものが多く、国冬本と共通する異文、

国冬本と陽明文庫本両本に共通する異文がほとんどで、国冬本はやはり河内本そのものに近い本文を有している。このことは「資料　8」で指摘した両本の関係を考えざるを得ないように思う。後半は河内本の異文が減少し、しかも片々たる語の形での異文にとどまっている。陽明文庫本の一行近い挿入的構文の脱文を除くと、語の形であらわれる異文であり、別本の独自異文も少なく、諸本間の本文の異同が、やはり極端に少なくなっている。こうした事実は、資料の全体を総合、分析した結果から考えられなければならないが、重要な問題を示唆しているように思われる。そして、後半部のこうした本文の性格は、以下の資料にも指摘することができるように思われる。

㊵・㊶　河内本の独自異文は六例で、青表紙本に対する河内本の異文五例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　17」）

(イ)国・4　　(ロ)国・陽・1

これによれば、河内本の異文総数十一例中、別本諸本と共通するものは五例で、共通異文率は四五・五%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は四五・五%、陽明文庫本は九・一%に過ぎない。共通異文数に対する諸本の近親度は国冬本一〇〇%、陽明文庫本二〇%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・13　　国・8

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・六三倍となり、「資料　16」の傾向を継承している。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・6（1）

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は四六・二%、国冬本のそれは七五%である。

「資料　17」に見られる特徴は、第五類の五例・第六類の一例が、㊵頁前半に連続してあらわれていることである。前半部以下には両本のみの共通異文は全く存在しない。こういう本文の片寄りをどのように説明すべきであろうか。更に河内本の異文も片々たる語句の形のものに限られているし、別本諸本の異文も極端に減少し、「資料　16」の傾向を継承している。そして、次の資料ではまた別の傾向が見られるのである。

㊷・㊸　河内本の独自異文は一例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　18」）

(イ)国・8（1）　(ロ)国・陽・4

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・12（1）　陽・4

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十三例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は九二・三％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は九二・三％、陽明文庫本は三〇・八％に過ぎない。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇％、陽明文庫本三三・三％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・19　陽・7

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二・七一倍となり、「資料」「16」、「17」と続いた陽明文庫本に独自異文の多い傾向は逆転している。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・6

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は三一・六%、陽明文庫本のそれは八五・七%である。

「資料　18」に見られる特徴は、「資料」「16」、「17」にあらわれていた傾向とは異る面が見られることである。異文はいずれも片々たる語句の形であらわれ、河内本と国冬本とは密接な関係を共通異文という視点から持つ反面、独自異文という視点に立てば、国冬本は多くの異文を持っている。こうした河内本に対する背反する性格をどう捉えていくか、やはり資料の全体的な集計と分析とを通して考えられていかなければならないが、重要な問題を示唆しているように思われる。河内本と陽明文庫本との関係が、この資料のような形であらわれている以上、第五類との関係を重視し、陽明文庫本の独自異文の少ない点を考慮すると、国冬本を介して関係づけていくことが自然のように思われる。そして、こういう視点に立つと、やはり青表紙本対河内本・別本という対立関係を本質的に想定していかざるを得ないのではないかと思われる。

㊹・㊺　河内本の独自異文はなく、青表紙本に対する河内本の異文六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　19」）

(イ)国・5　　(ロ)陽・1

これによれば、河内本の異文総数六例はすべて別本諸本と共通異文を形成しているので、共通異文率は一〇〇%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は八三・三%、陽明文庫本は一六・七%である。共通異文数に対する諸本の近親度もこれに同じである。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・14　　陽・7

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二倍となっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・4

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二八・六%、陽明文庫本のそれは五七・一%である。「資料　19」は、前半は「18」に続いて頭中将が常夏の女の物語をしていく部分で、本文の性格、系統は「18」と非常によく似ている。後半は源氏の「さて、その文の詞は」ではじまる三首の和歌を中心に、常夏の女との物語を語る部分で、極端に異文が減少して最も異文の少ない部分になっている。㊺頁は河内本の異文が一例、これは国冬本との共通異文、国冬本と陽明文庫の異文各一例、両本に共通する異文三例がすべてである。やはり、本文の系統を考えていく上で、こうした部分の集積の上に成り立っているという事実が大切なのである。

㊻・㊼　河内本の独自異文は六例で、青表紙本に対する河内本の異文八例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　20」）

(イ)国・3　　(ロ)陽・3〈国・1〉　　(ハ)国・陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・6（1）　　陽・5

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十四例中、別本諸本と共通するものは八例で、共通異文率は五七・一%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は四二・九%、陽明文庫本は三五・七%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七五%、陽明文庫本六二・五%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・20　　陽・8

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二・五倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・8（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は四〇%、陽明文庫本のそれは一〇〇%である。「資料　20」に見られる傾向も、前資料と似ている。前半は「資料　19」の後半をうけ、後半は陽明文庫本と国冬本との共通的異文が六例集中的に表われ、他の二例もこれに直前する「まだ世にあらば」以下にすべて偏在している。河内本の異文が片々たる語句の異同にとどまり、しかも減少していく傾向のなかで、両本のこうした関係が顕著に浮上してくるのはどうしてか、本文系統を考えていく上でやはり注意しなければならないことのように思われる。

㊽・㊾　河内本の独自異文は一例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　21」）

(イ)陽・5　　(ロ)国・4（1）〈陽　1〉　　(ハ)国・陽・3

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・9（1）　　国・7（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十三例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は九二・三%である。陽明文庫本の異文総数に対する共通異文率は六九・二%、国冬本は五三・八%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、陽明文庫本七五%、国冬本五八・三%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・12　　陽・11

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・〇九倍となっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。

国・陽・11（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は九一・七％、陽明文庫本のそれは一〇〇％である。「資料　21」に見られる特徴は、河内本に最も近い本文を有するのは陽明文庫本であること、国冬本、陽明文庫本の異文が比較的少なく、両本に共通する異文が多いことである。「資料　20」に見られたように、河内本の異文が片々たる語句の異同にとどまり、しかも減少していく傾向のなかで、両本のこうした関係がやはり顕著に浮上してくるのである。それは、河内本との共通異文が、「国・陽」という形であらわれてくるものが、河内本との共通異文率では、陽明文庫本三三・三％、国冬本四二・九％に達していることからも明かであり、両本は河内本との共通異文の面でも同じ傾向を示していることになる。

㊿・51　以下、「資料　24」までの間に『源氏物語大成』には数例に及ぶ誤校と見られるものが存在する。資料の統計は手沢本に校合を加えた本文に従ったので、若干の異同はそうした事情によって生じたものである。「24」以下にも『大成』には誤校と見られるものがいくつか存在する。河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文十六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　22」）

(イ)国・8　(ロ)国・陽・6　(ハ)陽・2〈国・1〉

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・15（1）　陽・8

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十八例中、別本諸本と共通するものは十六例で、共通異文率は八八

・九％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は八三・三％、陽明文庫本は四四・四％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本九三・八％、陽明文庫本五〇％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・16　　陽・13

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・二三倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・6

国冬本の独自異文に対する共通異文率は三七・五％、陽明文庫本のそれは四六・二％である。「資料　22」に見られる特徴は、全般的には本文の異同が少ないことであり、河内本の異文が前半の部分に集中してあらわれ七二・二％に達し、別本諸本の本文異同もそれに伴って多少多く見られる点である。そして河内本は依然として国冬本と深い関係にあり、陽明文庫と河内本が単独で共通異文を形成しているのは、㊿頁の「見え――おほゆ」だけであり、国冬本はこの語を欠いている。その他の共通異文は、ことごとく国冬本が関与しながら陽明文庫本とも共通異文を形成している。しかも、国冬本と陽明文庫本の独自異文に対する共通異文率は四割近い。こうした事実は、やはり本文の系統、性格を考えていく上で、注意しておかなければならないことである。

㊷・㊸　河内本の独自異文はなく、すべての異文は別本諸本と共通異文を作っている。青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　23」）

(イ)国・5（1）　(ロ)国・陽・5　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・10（1）　陽・6

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十一例は、すべて別本諸本と共通するので、共通異文率は一〇〇％である。国冬本の共通異文率は九〇・九％、陽明文庫本は五四・五％である。共通異文数に対する国冬本、陽明文庫本の近親度も、それぞれ共通異文率と同じである。

次に、青表紙本、河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・13　陽・11

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・一八倍に過ぎない。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・3

国冬本の独自異文に対する共通異文率は二三・一％、陽明文庫本は二七・三％である。「資料　23」に見られる特徴は、河内本の独自異文が全く存在しないことである。かなり長い語句の異文が四例あり、陽明文庫本とは三例、国冬本とはすべてが共通異文を形成する。陽明文庫本と共通異文を作らない一例は、資料前半の最初の部分にあり、その部分にある河内本の異文四例は、一例を除いて国冬本との共通異文を形成し、他の一例も、「国、陽」の形で異文を作っている。国冬本と陽明文庫本との共通異文三例もこの部分に存在する。こうした特徴は、「資料　22」で既に指摘したごとくである。資料の後半は、かなり長い語句の河内本の異文が「国、陽」の形で共通異文を作り、国冬本、陽明文庫本と共通、またはほぼ共通する異文を形成するものがそれぞれ一例ずつ存在する。㊸「わか僅かに」の河内本、陽明文庫本との共通異文、「思ひて」に対する河内本の「思ほし」、国冬本の「おほし」という、ほぼ共通する異文の存在の扱い方如何では、河内本、国冬本、陽明文庫本は同一の祖本から成立したと考えられ、ほとんど三本は、

同一系統本と断じ得るようにも思われるが、やはり、全体の資料の分析、総合を通して考えられなければならないことのように思う。だが、それらの異文の扱い方によっては、別の考え方ができるようにも思う。

㊹・㊺　河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　24」）

(イ)国・7〈陽・2〉　(ロ)国・陽・3　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・10　陽・6（2）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十三例中、別本諸本と共通するものは十一例で、共通異文率は八四・五％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七六・九％、陽明文庫本は四六・二％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本九〇・九％、陽明文庫本五四・五％である。

次に青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・16　陽・9

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・七七倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・5（1）

国冬本の独自異文に対する共通異文率は三一・三％、陽明文庫本のそれは五五・六％である。「資料　24」の特徴は、資料の前半はやはり「23」の後半をうけ、河内本の比較的長い語句の異文があり、それらは、国冬本、陽明文庫本の本文に近い。だが仔細に検討していくと、陽明文庫本の本文とは一部の語句が重ならない。国冬本との密接な関係を

指摘すべきであるが、その独自異文が十六例に達することや異文の内容を考慮に置いたり、河内本と陽明文庫本との共通異文を考えたりすると、国冬本が河内本そのものであったとすることはできない。しかも、資料の後半は河内本の異文も片々たる語の異同が見られるだけになる反面、国冬本を中心に別本の異文も多少多くなっていく傾向があり、前半のように、国冬本が河内本そのものであるかのような形態にはなっていない。こうした本文の実態をやはり集積し帰納していく必要があるように思われる。

㊻・㊼　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文十一例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　25」）

(イ)国・8〈陽・1〉　(ロ)国・陽・3

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・11　陽・4（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十四例中、別本諸本と共通するものは十一例で、共通異文率は七八・六％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七八・六％、陽明文庫本は二八・六％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇％、陽明文庫本三六・四％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・19　陽・5

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の三・八倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二六・三%、陽明文庫本のそれは一〇〇%である。「資料　25」に見られる特徴は、陽明文庫本の独自異文が極めて少なく、かなり長い語句の異文が国冬本と一致していることであり、河内本との共通異文も陽明文庫本単独では形成するものがないことである。国冬本は河内本と深い関係にあり、共通異文のすべてに亘って一致しながらも、独自異文の存在という視点からは、やはり河内本そのものであるとは断じ得ない。こうした本文の実態をどう考えていくかは、やはり全体の資料を検討してみた上で判断すべきことではあるが、かなり示唆的な問題をなげかけているように思われる。

㊽・㊾　河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　26」）

(イ)国・陽・7　(ロ)陽・3　(ハ)国・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・10　国・9

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十六例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は七五%である。陽明文庫本の異文総数に対する共通異文率は六二・五%、国冬本は五六・三%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、陽明文庫本八三・三%、国冬本七五%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・15　陽・7

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の二・一四倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・5（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は三三・三%、陽明文庫本のそれは七一・四%である。

「資料　26」に見られる傾向は、河内本との共通異文の形成、その近親性という点で陽明文庫本の方が、国冬本よりも近い関係にあると考えられる点で、「資料　25」などと異る特徴がある。河内本の異文も片々たる語句に過ぎないし、異文という点では陽明文庫本と国冬本の共通異文である㊽頁の二例、㊾頁の三例の方が長く重要な語句である点を考慮すると、近親性は深いものの、やはり全く同じ系統に属するものであるとは考え難い。しかし、そうした片々たる語句が、また微妙に一致しているという厳然たる実態も動かし得ない実事である。こうした事実を矛盾なく説明することができるだろうか。やはり、「祖本」の存在を想定せざるを得ないが、どういう段階に、どういう形で存在したかという点が重大である。確かに、そうした想定は困難であり、「源氏物語　桐壺巻の本文と物語の享受」（本誌第二号　昭和60年3月）で指摘したごとく、吉岡曠氏の想定されたような校訂過程を経て河内本が成立したものとは考え難いが、やはり、こういう異文の重なり方は普通ではないと考えるべきである。㊽頁の「悪しき――あやしき　国」は、国冬本の独自異文として第四類に分類したが、河内本系統の伝二条為明筆　七毫源氏・就山筆　高松宮家本・青表紙本系統の伝冷泉為秀本なども「あやしき」の本文をもち、国冬本の独自異文とは考えられない。だが、そこまで踏み込んでいくと、従来の本文系統論のごとく循環論的矛盾に逢着せざるを得ないのである。やはり、一つの前提、仮説の上に立って論証していくことが、源氏物語の本文の性格、系統を考えていく上に必要なのである。混成と混態とがくり返されてきた物語の本文であるがゆえにそれが必要であり、そうした方法を認めない以上、『大成』ではだめだ、役に立たないという最近の源氏学の一般的評価に落着していくことになってしまう。だが、吉岡氏の指摘された意味を、やはり再検討していくことによって、池田亀鑑博士の業績をほんとうの意味で評価・継承していく

ことになりはしないか、と考えている。

⑥⓪・⑥① 河内本の独自異文はなく、すべての異文は別本諸本と共通異文を作っている。青表紙本に対する河内本の異文十三例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　27」）

(イ)国・7（1）　(ロ)国・陽・5　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・12（1）　陽・6

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十三例は、すべて別本諸本と共通するので、共通異文率は一〇〇％である。国冬本の共通異文率は九二・三％、陽明文庫本は四六・二％である。共通異文数に対する国冬本、陽明文庫本の近親度も、それぞれ共通異文率と同じである。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・16　国・13

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・二三倍と逆転している。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・2

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は一五・四％、陽明文庫本は一二・五％に過ぎない。

「資料　27」に見られる特徴は、河内本の独自異文がなく、国冬本との関係が異常に密接であること、国冬本の独自異文が陽明文庫本のそれよりも少ないこと、両本に共通する異文も異常に少ないことなどである。

⑥②・⑥③ 河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文六例は、別本諸本と次のような関係で共通異

文を形成する。（「資料　28」）

(イ)国・陽・5　　(ロ)国・1

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数八例中、別本諸本と共通するものは六例で、共通異文率は七五％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七五％、陽明文庫本は六二・五％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇％、陽明文庫本八三・三％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・16　　陽・12

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・三三倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・10（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は六二・五％、陽明文庫本のそれは八三・三％である。

「資料　28」に見られる特徴は、河内本の異文が極端に少なく、資料の前半と後半とではかなり本文の性格に違いが見られることである。すなわち、資料の前半には「資料　27」の後半部を承けた本文的性格がみられるが、「ことなる事なければ」から「人々もしづまりぬ」までの一段には、国冬本と陽明文庫本との共通的異文十例が集中的にあらわれている。これは両本の共通異文の九〇％であり、次の「あるじの子どもをかしげにてあり」からは、国冬本、陽明文庫本の独自異文が頻繁にあらわれて、共通異文は一例存するだけである。国冬本の独自異文の八七・五％、陽明文庫本の独自異文の八三・三％がこの部分にあらわれているのである。こうした本文の性格的片寄りは、偶然であると考えることは許されない。既に指摘してきたように、やはり本文校訂の作業の実態を如実に示すものだと言わな

ければならない。それ以外に、説明のしようがないように思われる。

⑥④・⑥⑤ 河内本の独自異文は一例で、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　29」）

(イ)国・5　(ロ)国・陽・5　(ハ)陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・10　陽・7

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十三例中、別本諸本と共通するものは十二例で、共通異文率は九二・三％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七六・九％、陽明文庫本は五三・八％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八三・三％、陽明文庫本五八・三％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・16　国・14

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・一四倍と逆転して多くなっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・7

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は四三・八％、国冬本のそれは五〇％である。

「資料　29」に見られる特徴は、やはり河内本の異文が片々たる語の異同に限られていること、別本との共通異文率が九二・三％に達していること、別本の独自異文数は陽明文庫本の方が多く、系統論的性格第二は国冬本の位置も逆転しているし、比率も異るなどの点である。この結果、国冬本の異文が質、量の両面に亘って極端に減少傾向を示

し、河内本に最も近い本文となっている。そして、少ない異文のなかで、国冬本と陽明文庫本の共通異文率が四〇から五〇％と、かなり高くなっている。こうした傾向は、青表紙本とさして対立する本文的性格を有しない中にあっても、対河内本・別本という対立の存在を示唆する結果になっている点を注意深く読みとっていく必要がある。

㊻・㊼　河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文十四例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　30」）

(イ)国・11　　(ロ)国・陽・3

これによれば、河内本の異文総数十六例中、別本諸本と共通するものは十四例で、共通異文率は八七・五％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は八七・五％、陽明文庫本は一八・八％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇％、陽明文庫本二一・四％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・11　　国・8

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・三八倍と、「資料　29」と同様、逆転しその比率が更に大きくなっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は四五・五％、国冬本のそれは六二・五％である。

「資料　30」に見られる特徴は、資料の前半と後半によってかなりその性格に違いが見られることである。前半は河内本の異文も語に限られた片々たる異文が六例で、別本諸本の異同も少ない。それに対して、後半は、河内本の異

文も語句が中心となり、国冬本、陽明文庫本の共通異文四例も、この部分に重なって集中的にあらわれてくる。しかも、河内本の異文は、すべての共通異文に亘っていて、陽明文庫本の共通異文三例は、いずれも単独では共通異文を作っていない。国冬本との密接な関係が考えられるが、河内本との関係という視点からは、国冬本はほとんど河内本とも言い得る本文的性格を備えているが、独自異文と陽明文庫本との関係という視点からは、やはり、そのものであると断定することは困難である。だが、再三に亘って指摘してきたように、こうした本文的性格は注意されなければならない。

㊽・㊾　河内本の独自異文はなく、すべての異文は別本諸本と共通異文を作っている。青表紙本に対する河内本の異文七例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　31」）

(イ)国・陽・6　　(ロ)国・1

これによれば、河内本の異文総数七例は、すべて別本諸本と共通するので、共通異文率は一〇〇％である。国冬本の共通異文率は一〇〇％、陽明文庫本は八五・七％である。共通異文数に対する国冬本、陽明文庫本の近親度も、それぞれ共通異文率と同じである。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・13　　陽・13

となり、国冬本、陽明文庫本の独自異文は同数である。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・7（1）

国冬本、陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は五三・八％で同率である。

「資料　31」に見られる特徴は、河内本の異文が極端に減少し、片々たる数語に過ぎないこと、河内本はすべて別本と共通異文を作っているが、「国・陽」の形で異文を形成するものが八五・七％に達し、ことに陽明文庫本は単独では共通異文を作らない。いずれも、国冬本とのかかわりの中で共通異文を作っている。別本両本の異文も少なく、全般的にきわめて本文異同の少ない部分である。しかし、両本の共通異文は、やはり、連続的、集中的にあらわれていて校訂作業の実態を示唆しているように思われる。

⑩・⑪　河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文六例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　32」）

(イ)国・2（1）　(ロ)陽・2（1）　(ハ)国・陽・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・4（1）　陽・4（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数八例中、別本諸本と共通するものは六例で、共通異文率は七五％である。国冬本、陽明文庫本の異文総数に対する共通異文率は、ともに五〇％で変らない。共通異文数に対する両本の近親度は、ともに六六・七％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・17　陽・12

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・四二倍となっている。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・7

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は四一・二%、陽明文庫本のそれは五八・三%である。

「資料　32」に見られる特徴は、資料の前半と後半とではかなり性格に違いのある点である。河内本の異文はすべて前半にあらわれ、国冬本と陽明文庫本との共通異文もこの部分に集中的にあらわれている。八五・七%の共通異文がこの部分に存在する。後半の異文は、片々たる語の形であらわれるものばかりであり、手沢本の書き入れも最も少ない部分になっている。後半部の異文は、一例を除いては断片的で、その本文的性格の系統を推定する根拠となるものは見当らない。

㉒・㉓　河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の異文九例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　33」）

(イ)国・陽・6（1）　(ロ)国・3

これによれば、河内本の異文総数十三例中、別本諸本と共通するものは九例で、共通異文率は六九・二%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は六九・二%、陽明文庫本は四六・二%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇%、陽明文庫本六六・七%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・15　　陽・10

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・五倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・3

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は三〇%、国冬本のそれは二〇%である。

「資料　33」に見られる傾向は、河内本の異文がやはり減少していること、別本系両本の異文も片々たる異同にとどまっていること、陽明文庫本は単独では河内本との共通異文を作らないこと、などが特徴としてあげることができる。一般的に、資料的価値の乏しい部分と言うことができよう。

㉔・㉕　河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文十例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　34」）

(イ)国・陽・5　　(ロ)陽・3　　(ハ)国・2

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・8　　国・7

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十二例中、別本諸本と共通するものは十例で、共通異文率は八三・三％である。陽明文庫本の異文総数に対する共通異文率は六六・七％、国冬本は五八・三％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、陽明文庫本八〇％、国冬本七〇％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・6　　陽・5

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・二倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・3

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は五〇％、陽明文庫本のそれは六〇％である。

「資料　34」に見られる特徴は、別本系両本の異文が極端に減少し、数例にとどまる点であり、両本に存する共通

異文三例を考慮しても、河内本、陽明文庫本、国冬本という二系三類の本文を強いて立てることは困難のように思われる。この部分に関する限り、同一系統内に属すると考えた方が、やはり妥当のように思われもするが、こうした実態をどう捉え解釈していくかは、全体の資料の分析と総合を通してなされなければならない。

㊻・㊼　河内本の独自異文は三例で、青表紙本に対する河内本の異文十四例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　35」）

(イ)国・6　　(ロ)国・陽・5（1）　　(ハ)陽・3〈国・1〉

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・12（2）　　陽・8（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十七例中、別本諸本と共通するものは十四例で、共通異文率は八二・四％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は七〇・六％、陽明文庫本は四七・一％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八五・七％、陽明文庫本五七・一％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

陽・12　　国・9

となり、陽明文庫本の独自異文は国冬本の一・三三倍と両本の位置を逆転させている。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国・陽・8（1）

陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は六六・七％、国冬本のそれは八八・九％である。

「資料　35」に見られる特徴は、「34」で指摘したごとく、この程度の異文のなかにこれだけの共通異文があらわ

れてくると、やはり別系統の本文とは言い得ないのではないかという戸惑いを感じる点である。「祖本」を想定するとしても、こういう実態のなかでどういう段階を考えるべきか、また、「祖本」という考えで処理することが妥当であるかという点も考えてみる必要があるように思われる。帚木一帖の本文が、すべてこういう傾向を示しているならば比較的問題は少ないが、いろいろな本文的性格、系統をからませているところに、検討を加うべき問題があるのである。こうした点についても、やはり全資料とのかかわりのなかで考えていく必要があるように思う。

㉘・㉙　河内本の独自異文は一例で、青表紙本に対する河内本の異文九例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　36」）

(イ)国・5　(ロ)国・陽・3　(ハ)陽・1

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・8　陽・4

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十例中、別本諸本と共通するものは九例で、共通異文率は九〇％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は八〇％、陽明文庫本は四〇％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八八・九％、陽明文庫本四四・四％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・17　陽・4

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の四・二五倍に達する。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二九・四%、陽明文庫本のそれは一二五%に達する。

「資料　36」に見られる特徴は、国冬本の一行半に亘る長文の独自異文が存することであり、それは国冬本の独自異文が陽明文庫本の四倍強に達していることと深くかかわることのように思われる。河内本は陽明文庫本との単独共通異文一例を作っているが、㉘頁「霧りふたがりて――目も霧りて　河・陽・」の形であらわれている。ところが、この部分は四類に分類したが、国冬本では「めも霧ふたかり」となっていて、やはり、国冬本ともかかわる点があるようにも思われる。資料操作の結果から見ても、河内本は国冬本に最も近い本文であるとすべきもののようである。

㉚・㉛　河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文十五例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　37」）

(イ)国・8〈陽・2〉　(ロ)国・陽・7

河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・15　陽・9（2）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十七例中、別本諸本と共通するものは十五例で、共通異文率は八八・二%である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は八八・二%、陽明文庫本は五二・九%である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本一〇〇%、陽明文庫本六〇%である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・21　陽・5

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の四・二倍に達する。この比率は「資料　36」に近く、「37」の計数は一般に「36」に近い。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・5

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二三・八%、陽明文庫本のそれは一〇〇%に達する。

「資料　37」に見られる特徴は、河内本と共通異文を作る場合、国冬本が関与し、陽明文庫本は単独では異文を作っていない点である。共通異文という視点からすれば、河内本に最も近いのは国冬本ということになるが、独自異文という視点に立つと、国冬本には二十一例、陽明文庫本の四倍強に達する異文があり、しかも語句に亘る五例の異文が存在し、河内本の異文も語句に亘るものが四例あるため、手沢本の色別による校合もかなりにぎやかになっている。既に指摘したことではあるが、一見こういう矛盾した性格とも言えるような本文的性格をもつ国冬本をどう位置づけていくか、本文系統論としては最も大切な部分になるはずであるが、やはり、こうした点も全体とのかかわりのなかで考えていかなければならない。

陽明文庫本は、河内本や国冬本と共通異文を作ることが多く、その独自異文は五例に過ぎない。こういう視点からすると、陽明文庫本は河内本や国冬本、更には青表紙本にも近い本文的性格をもつものであると言うことができる。

㉜・㉝　河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の異文十五例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料　38」）

(イ)国・陽・7（1）　(ロ)国・6　(ハ)陽・2

河内本との共通異文を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・13（1）　陽・9（1）

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十九例中、別本諸本と共通するものは十五例で、共通異文率は七八

・九％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は六八・四％、陽明文庫本は四七・四％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本八六・七％、陽明文庫本六〇％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・18　　陽・10

となり、国冬本の独自異文は陽明文庫本の一・八倍である。

次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文とを集計する。

国、陽・5（1）

国冬本の独自異文数に対する共通異文率は二七・八％、陽明文庫本のそれは五〇％である。

「資料　38」に見られる特徴は、「37」などでは、河内本と陽明文庫本とが単独で共通異文を作ることがなかったのに対して、ここでは単独で共通異文を形成し、「国、陽」の形であらわれる異文が七例、共通異文数の八七・五％も存在し、最も多い群を形成していることである。その他の点については、既に指摘したごとくである。

㊹・㊺　この部分には、㊺頁のなか程「帚木の心を知らで」の歌以下、巻末の「あはれに思さるとぞ」までが国冬本に落丁がある。㊺頁のこの部分には二首の和歌を含むが、河内本の異文もなく、陽明文庫本に片々たる語の異文二例が存するだけであるが、落丁の前までを資料「39」とし、それ以下は「40」として分割した。従って資料「39」は一般の四分の三の量となり、資料「40」がほぼ二頁分に相当することになる。

河内本の独自異文は二例で、青表紙本に対する河内本の異文八例は、別本諸本と次のような関係で共通異文を形成する。（「資料39」）

(イ)国・5　　(ロ)陽・2　　(ハ)国・陽・1

河内本との共通異文を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

国・6　　陽・3

これらの結果を総合すると、河内本の異文総数十例中、別本諸本と共通するものは八例で、共通異文率は八〇％である。国冬本の異文総数に対する共通異文率は六〇％、陽明文庫本は三〇％である。共通異文数に対する諸本の近親度は、国冬本七五％、陽明文庫本三七・五％である。

次に、青表紙本・河内本に対する別本の独自異文を集計すると、

国・9　　陽・9

となり、両本の異文数は同じである。

次に、別本諸本の間で共通する異文を集計する。

国・陽・4

国冬本、陽明文庫本の独自異文数に対する共通異文率は、ともに四四・四％と同率である。

「資料39」も、「38」と同じように、陽明文庫本が単独で河内本と共通異文を作っている。その二例は、いずれも資料の最終部分に見られるが、別本系両本の異文も減少していくなかで、やはり河内本と国冬本とは密接なかかわりをもっている。だが、国冬本は河内本そのものであると考えることは不可能である。

㊺・㊻・㊼　河内本の異文が異常に少ない。国冬本に落丁があるので、校合は陽明文庫本一本だけである。従って、これまで試みてきた方法によって異文の処理を行うことはできないので、集計のみを行うことにする。（「資料40」）　河内本の独自異文は三例で、陽明文庫本と共通する異文とほぼ共通する異文は、

陽・3（2）

である。陽明文庫本の独自異文は、

陽・16

である。「資料　40」については、これ以上の資料の処理・操作は行わないことにする。

以上、帚木の巻を「0」から「40」の四十一の資料に分け、異文を調査、分類してきたが、次にそれらを集計、分析しながら、別本諸本の本文の性格と系統について考察を加えていくことにする。

2

最初に資料の集計を二種類に分類して示す。集計「1」は異文数を示し、最下段の「計」は、その類と類型の合計を、「%」は、その類の中で、その類型が占める百分率を示したものである。集計「II」は、各類の百分率はその「類」の「計」に対するその資料部分の百分率を、各類型の百分率は、その資料の「類」に対する百分率を示したものである。資料「0」と「39」はそれぞれ手沢本の三頁分弱、一頁分半であり、その他の資料は二頁分である。()内は、ほぼ共通する異文の内数である。また、「国冬本　3」に「陽(2)」と右側に傍書してあるのは、国冬本と共通異文を有するものが三例あり、その中に陽明文庫本とほぼ共通する異文を作っているものが二例あることを示したものである。

「集計」IIの最後尾の、国冬本・陽明文庫本の欄に二段組で示した百分率は、上段はそれぞれ国冬本・陽明文庫本の、河内本の異文総数に対する、河内本との共通異文を単純化して、諸本ごとに還元した異文数との共通異文率を示したものである。下段は、河内本と別本系諸本と共通する異文数に対する、単純化、還元された諸本の異文数の百分率を示したものであり、河内本と別本系諸本との関係の親疎を表わしたものであるから、「近親度」と言うことにす

る。

第一類から第六類までの分類は、「資料」「0」で指摘した分類で、これを「類」として扱い、「国冬本」などと分類したものを「類型」として扱う。「集計」II (二)の最終欄「%」は、第四類総数に対する百分率である。

資料 0〜40 集計 I

分類 ＼ 資料No.	(イ)第一類	(ロ)第二・三類	国冬本	陽明文庫本	国・陽	(ハ)第四類	国冬本	陽明文庫本	(ニ)第五・六類
0	5	11	1	3	7(1)	38	26	12	6(1)
1	9	7	5(1)	2	0	35	24	11	3(2)
2	7	7	4	2	1	30	24	6	10(1)
3	9	13	7(2)	3	3(1)	39	30	9	2(1)
4	7	10	3(1)	3	4	46	33	13	3(1)
5	13	7	5(3)	1(1)	1	35	24	11	0
6	3	6	3(2)	2	陽 1(1)	39	28	11	1
7	3	7	2	2	3(1)	47	35	12	3
8	8	13	11	1	1	55	41	14	1(1)
9	3	7	5(1)	2	0	41	31	10	4
10	5	11	3	2	6(1)	35	22	13	2
11	9	12	3 陽(2)	6(1)	3(1)	52	39	13	3(1)
12	8	7	5	2	0	33	20	13	8
13	3	6	5	0	1(1)	32	20	12	5
14	3	16	7	1	8	16	9	7	3(2)
15	3	12	陽 7(2)	1	4	29	11	18	5
16	4	11	陽 7(1)	0	4	21	7	14	4(1)
17	6	5	4	0	1	21	8	13	6(1)
18	1	12	8(1)	0	4	26	19	7	6
19	0	6	5	1	0	21	14	7	4
20	6	8	3	国 3(1)	2	28	20	8	8(1)
21	1	12	4 陽 (1)(1)	5	3	23	12	11	11(1)

資料No. ＼ 分類	(イ)第一類	(ロ)第二・三類	国冬本	陽明文庫本	国・陽	(ハ)第四類	国冬本	陽明文庫本	(ニ)第五・六類	(ホ)第二・三類を諸本に還元
22	2	16	8	国 2(1)	6	29	16	13	6	
23	0	11	5(1)	1	5	24	13	11	3	
24	2	11	陽 7(2)	1	3	25	16	9	5(1)	
25	3	11	陽 8(1)	0	3	24	19	5	5	
26	4	12	2	3	7	22	15	7	5(1)	
27	0	13	7(1)	1	5	29	13	16	2	
28	2	6	1	0	5	28	16	12	10(1)	
29	1	12	5	2	5	30	14	16	7	
30	2	14	11	0	3	19	8	11	5	
31	0	7	1	0	6	26	13	13	7(1)	
32	2	6	2(1)	2(1)	2	29	17	12	7	
33	4	9	3	0	6(1)	25	15	10	3	
34	2	10	2	3	5	11	6	5	3	
35	3	14	6	国 3(1)	5(1)	21	9	12	8(1)	
36	1	9	5	1	3	21	17	4	5	
37	2	15	陽 8(2)	0	7	26	21	5	5	
38	4	15	6	2	7(1)	28	18	10	5(1)	
39	2	8	5	2	1	18	9	9	4	
40	3	3		3(2)		16		16		
計	155	408	199	68	141	1193	752	441	193	
%	38.0		48.9	16.7	34.6		63.0	37.0	16.2	

陽明文庫本	国冬本	(ホ)第二・三類を諸本に還元
10(1)	8(1)	
2	5(1)	
3	5	
6(1)	10(3)	
7	7(1)	
2(1)	6(3)	
3(1)	4(2)	
5(1)	5(1)	
2	12	
2	5(1)	
8(1)	9(1)	
11(4)	6(1)	
2	5	
1(1)	6(1)	
9	15	
7(2)	11	
5(1)	11	
1	5	
4	12(1)	
1	5	
5	6(1)	
9(1)	7(1)	

資料 0〜40 集計 II

(ニ) 陽明文庫本	(ニ)第五・六類 国冬本	陽明文庫本	国冬本	(ハ)第四類	国・陽	陽明文庫本	国冬本	(ロ)第二・三類	(イ)第一類	分類 / 資料No.	陽明文庫本	国冬本
50.0	23.1	31.6	68.4	3.2	63.6	27.3	9.1	2.7	3.2	0	8	15(1)
27.3	12.5	31.4	68.6	2.9		28.6	71.4	1.7	5.8	1	6	10(1)
16.7	41.7	20.0	80.0	2.5	4.1	28.6	57.1	1.7	4.5	2	6(2)	10
22.2	30.0	23.1	76.9	3.3	23.1	23.1	53.8	3.2	5.8	3	4(1)	11
23.1	9.1	28.3	71.3	3.9	40.0	30.0	30.0	2.5	4.5	4	10	9
・	・	31.4	68.6	2.9	14.3	14.3	71.4	1.7	8.4	5	6	12(1)
9.1	3.6	28.2	71.8	3.3	16.7	33.3	50.0	1.5	1.9	6	5	6
25.0	8.6	25.5	74.5	3.9	42.9	28.6	28.6	17	1.9	7	7	10
7.1	2.4	25.5	74.5	4.6	7.7	7.7	84.6	3.2	5.2	8	3	14
40.0	12.9	24.4	75.6	3.4		28.6	71.4	1.7	1.9	9	6	7
15.4	9.1	37.1	62.9	2.9	54.5	18.2	27.3	2.7	3.2	10	4(1)	4(1)
23.1	7.7	25.0	75.0	4.4	25.0	50.0	25.0	2.9	5.8	11	6(1)	9(1)
61.5	15.0	39.4	60.6	2.8		28.6	71.4	1.7	5.2	12	8	7
41.7	25.0	37.5	62.5	2.7	16.7		83.3	1.5	1.9	13	8(1)	12(2)
42.9	33.3	43.8	56.3	1.3	50.0	6.3	43.8	3.9	1.9	14	4	8
27.8	45.5	62.1	37.9	2.4	33.3	8.3	58.3	2.9	1.9	15	9(2)	15
28.6	57.1	66.7	33.3	1.8	36.4		63.6	2.7	2.6	16	9(1)	13(1)
46.2	75.0	61.9	38.1	1.8	20.0		80.0	1.2	3.9	17	3	6
85.7	31.6	26.9	73.1	2.2	33.3		66.7	2.9	0.6	18	3	
57.1	28.6	33.3	66.7	1.8		16.7	83.3	1.5		19		
100	40.0	28.6	71.4	2.3	25.0	37.5	37.5	2.0	3.9	20	220	343
100	91.7	47.8	52.2	1.9	25.0	41.7	33.3	2.9	0.6	21	53.9	84.1

国冬本	(ニ)陽明文庫本	(ニ)第五・六類 国冬本	陽明文庫本	国冬本	(ハ)第四類	国・陽	陽明文庫本	国冬本	(ロ)第二・三類	(イ)第一類	分類 / 資料No.	陽明文庫本	国冬本
83.3 93.8	46.2	37.5	44.8	55.1	2.4	37.5	12.5	50.0	3.9	1.3	22	62.5 90.9	50.0 72.7
90.9 90.9	27.3	23.1	45.8	54.2	2.0	45.5	9.1	45.5	2.7	0	23	12.5 28.6	31.3 71.4
76.9 90.9	55.6	31.3	36.0	64.0	2.1	27.3	9.1	63.6	2.7	1.3	24	21.4 42.9	35.7 71.4
78.6 100	100	26.3	20.8	79.2	2.0	27.3		72.7	2.7	1.9	25	27.3 46.2	45.5 76.9
56.3 75.0	71.4	33.3	31.8	68.2	1.8	58.3	25.0	16.7	2.9	2.6	26	41.2 70.0	41.2 70.0
92.3 92.3	12.5	15.4	55.2	44.8	2.4	38.5	7.7	53.8	3.2	0	27	10.0 28.6	30.0 85.7
75.0 100	83.3	62.5	42.9	57.1	2.3	83.3		16.7	1.5	1.3	28	33.3 50.0	44.4 66.7
76.9 83.3	43.8	50.0	53.3	46.7	2.5	41.7	16.7	41.7	2.9	0.6	29	50.0 71.4	50.0 71.4
87.5 100	45.5	62.5	57.9	42.1	1.6	21.4		78.6	3.4	1.3	30	9.5 9.5	57.1 92.3
100 100	53.8	53.8	50.0	50.0	2.2	85.7		14.3	1.7	0	31	20.0 28.6	50.0 71.4
50.0 66.7	58.3	41.2	41.4	58.6	2.4	33.3	33.3	33.3	1.5	1.3	32	50.0 72.7	56.3 81.5
69.2 100	30.0	20.0	40.0	60.0	2.1	66.6		33.3	2.2	2.6	33	52.4 91.7	28.6 50.0
58.3 70.0	60.0	50.0	45.5	54.5	0.9	50.0	30.0	20.0	2.5	1.3	34	13.3 28.6	33.3 71.4
70.6 85.7	66.7	88.9	57.1	42.9	1.8	35.7	21.4	42.9	3.4	1.9	35	11.1 16.7	66.7 100
80.0 88.9	125	29.4	19.0	81.0	1.8	33.3	11.1	55.6	2.2	0.6	36	47.4 56.3	78.9 93.8
88.2 100	100	23.8	19.2	80.8	2.2	46.7		53.3	3.7	1.3	37	46.7 58.3	73.3 91.7
68.4 86.7	50.0	27.7	35.7	64.3	2.3	46.7	13.3	40.0	3.7	2.6	38	33.3 45.5	73.3 100
60.0 75.0	44.4	44.4	50.0	50.0	1.5	12.5	25.0	62.5	2.0	1.3	39	9.1 20.0	45.5 100
			•		•		•		0.7	1.9	40	30.8 33.3	92.3 100
												16.7 16.7	83.3 83.3
												35.7 62.5	42.9 75.0
												69.2 75.0	53.8 58.3

陽明文庫本
44.4 50.0
54.5 54.5
46.2 54.5
28.6 36.4
62.5 83.3
46.2 46.2
62.5 83.3
53.8 58.3
18.8 21.4
85.7 85.7
50.0 66.7
46.2 66.7
66.7 80.0
47.1 57.1
40.0 44.4
52.9 60.0
47.4 60.0
30.0 37.5

第一類は河内本の独自異文で、音便など表記にかかわるものを含め対校し得た異文数は百五十五例で、河内本が別本諸本と共通するものとほぼ共通するものを集めた「(ロ)第二・三類」は四百八例であるから、独自異文率は三八%に達する。桐壺の巻が、別本系諸本に御物本・麦生本・国冬本・陽明文庫本の四つの資料を備え、異文率が一四・七%に過ぎなかったのと比較すると二・五九倍と非常に高い比率になっている。このことは、帚木の巻の本文の性格・系統を考えていく上でやはり不利である。そのために、桐壺の巻で試みた資料操作に対応させながらも、この巻についてはまた別の処理を加えていく必要がある。

次に、(ロ)類の類型「国冬本」「陽明文庫本」「国・陽」の項は、河内本と共通異文を形成する場合の様態を示したもので、異文を単純化して諸本ごとに還元しない以前の姿を示したものであるが、国冬本は単独で河内本との共通異文率四八・九%、「国・陽」の形であらわれるものを加えると八三・三%に達する。また、諸本ごとに還元した共通異文数と第二・三類の異文数との共通異文率は八四・一%となる。これに対して、陽明文庫本は、五一・二%、五三・九%である。桐壺の巻の資料集計「(I)」の「(ロ)の第二・三類」の類型と対応するのは後者であるが、桐壺の巻の国冬本四四・九%、陽明文庫本六五・〇%と比較すると、河内本との関係という点で、桐壺の巻と帚木の巻とでは、やはり本文の性格に違いがあると考えなければならない。百分率そのものを単純に比較することは合理的でないが、両巻における両本の位置が逆転していること、両本の百分率の差が、桐壺の巻では二〇%、帚木の巻では三〇%という点を考慮すれば、両巻における両本の本文的性格の間には違いがあると考えざるを得ない。桐壺の巻の資料集計「(II)」の「(ロ)第二・三類」の「陽明文庫本」「国冬本」の百分率に対応するのが、帚木の巻では「集計　II」の最

後尾に二段組で示した上段部分であるが、百分率の逆転や極端な数値の対比など、両本の間には、やはり両巻によってかなり異質の部分が存在していることが明かである。これらの問題を図示すると次のようになる。

分類／共通異文百分率	桐壺 陽明文庫本	桐壺 国冬本	帚木 陽明文庫本	帚木 国冬本
100				1
90				3
80	1		1	5
70	8	1		8
60	6	2	5	4
50	2	5	7	9
40	2	5	10	5
30		4	5	4
20		2	4	1
10			6	
1			2	

右の図は、桐壺の巻の陽明文庫本では、共通異文率八〇%台の資料が十九資料中一例であることを示したもので、以下帚木の巻の四十資料についても同様の分布を示したものである。これによれば、桐壺の巻は百分率の五、六段階にその分布が集約されているのに、帚木の巻では九段階に亘って分布している。両巻での両本の位置の逆転、帚木の巻の国冬本と河内本の急激な接近、極端な数値の対比などを明確に指摘することができる。

次に、別本系諸本が青表紙本に対して異文をもつもののうち、一本のみの独自異文となっているものを集計したものが「(ハ)第四類」の類型であり、その「類」は両本の独自異文を合計した数値である。桐壺の巻と対比して図示する。

巻名／諸本	桐壺	帚木
国	410 38.3 21.6	752 63.0 18.8
陽	368 34.4 19.4	441 37.0 10.6
御	161 15.0 8.5	
麥	130 12.1 6.8	

この数値、百分率もそのままでは単純に比較することは合理的でない。右のうち、帚木の巻の陽明文庫本の四百四十一例は、国冬本を欠く「資料　40」の異文十六例が集計してあるので、それを除くと四百二十五例となる。各資料の上段は、独自異文数、中段は別本系諸本の総異文数と該当諸本の異文数との百分率、下段は一資料当りの平均的異文数を示したものである。これによれば、国冬本は、桐壺の巻では資料当りの平均的独自異文数は二十一・六例であるのに対して、帚木の巻では十八・八例と二・八例少ない。陽明文庫本は、桐壺の巻では十九・四例であるのに対して、帚木の巻では十・六例と八・八例も少ない。単純に考えれば、桐壺の巻の独自異文は、資料の種類が多いだけ独自異文の数が少なくなると考えられるのが一般的であるが、実態はその逆になっている。この事実は、桐壺の巻の異文が、量的にも質的にも帚木の巻に比べて多いというような算術計算的な問題とは次元を異にする問題のように思われる。桐壺の巻においては、国冬本対陽明文庫本の異文倍率は一・一一倍で、図表中段の異文率も三八・三%、三四・四%と両本ともに近接した数値になっている。ところが、帚木の巻における国冬本対陽明文庫本の異文倍率は一・七七倍で、異文率も六三・〇%、三七・〇%と、両本の数値は著しく異なっている。このことは、国冬本・陽明文庫本対河内本・青表紙本という視点に立って考えると、両本の性格・系統は、桐壺の巻と帚木の巻ではかなり違っているということができる。この事実は、源氏物語の本文の流伝が、巻々によって校訂のあり方を異にする本文が集められた形でなされてきたことを示している。国冬本や陽明文庫本の成立に当っては、そうした錯綜した形での校訂がなされたか、あるいは、そうした錯綜した形で校訂されていた本文を底本としたか、更にそれに校訂の手を加えていったか、というように考えていかざるを得ないのである。そして、こういう立場からすれば、「桐壺の巻の本文と物語の享受」で試みたように「原陽明・国冬本群」以下の系統図を想定できるように思う。

次に、「㈡第五・六類」は、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計したもので、桐壺の巻と対比

させて図示する。桐壺の巻の共通異文数は、諸本との共通異文を単純化して諸本ごとに還元し、その異文数と共通異文総数との百分率を示したものであり、帚木の巻は、国冬本と陽明文庫本の二本しか存在しないので、還元する必要がないので実数を、桐壺の巻に準じて処理した数値である。

巻名＼諸本	国冬本	陽明文庫本	麥生本	御物本
桐壺	208 87.4 10.95	206 86.6 10.84	43 18.1 2.26	42 17.6 2.21
帚木	193 50.0 4.83	193 50.0 4.83		

下段の数値は、一資料当りの平均的共通異文数を示したものであるが、桐壺の巻では、国冬本と陽明文庫本とが共通異文率八六～八七%に達し、一資料当り十一例に近い共通異文例をもっている。これに対して、帚木の巻では、両本の共通異文数は五例にも達しない。こうした視点から見ても、やはり両本の本文は、桐壺の巻と帚木の巻とでは本質的にその性格を異にすることが明かである。「(ハ)第四類」の独自異文、「(ニ)第五・六類」の共通異文という視点から見られる両本の両巻における本文的性格は、このように、完全にその性質を異にしていると考えることができる。

資料の全体的な問題点を要約すると以上のような問題点を指摘することができるようであるが、次にそれぞれの資料について分析的な考察を加えていくことにする。「資料　集計　II」の「(ホ)」類の類型は二段で示されているが、下段の数値は、河内本と別本系諸本の共通異文数に対する、単純化、還元された諸本の異文数の百分率を示したもので、河内本と別本系諸本との関係の親疎を表わす「近親度」を示したものであるが、全資料を分類し、資料番号を付して段階別分布表にまとめると次のようになる。○印内の算用数字は横に合計した数値である。

河内本との近親度という視点から見ると、国冬本は、五〇%台から一〇〇%までの間に全資料を集計し得るが、その九割までが七〇%台以上の範囲に集まり、近親度が非常に高い。これに対して、陽明文庫本は九・一%から九一・七%まで幅広く分布し、近親度も低く、五〇%以下が二十五資料にも及び六割強に達している。また、同一%台に、資料番号が連続して並んでいるものを抜き出して示すと、次のようになる。点線内は横に合計した数値である。

陽明文庫本	国冬本	諸本＼百分率
	13・16・17・18・25・28・30・31・33・37・ ⑩	100
0・11・ ②	8・14・15・22・23・24・27・ ⑦	90
26・28・31・34・ ④	5・10・19・29・35・36・38・ ⑦	80
4・7・10・21・ ④	0・1・2・3・4・7・9・12・20・26・34・39・ ⑫	70
20・32・33・37・38・ ⑤	6・32・ ②	60
6・14・15・22・23・24・29・35・ ⑧	11・21・ ②	50
2・3・16・27・36・ ⑤		40
18・25・39・ ③		30
1・5・9・12・17・19・30・ ⑦		20
13・ ①		10
8・ ①		1

連続して並んでいる資料の数	国冬本の例	陽明文庫本の例
2	⑭ ⑮ ㉚ ㉛ ㉟ ㊱	② ③ ⑭ ⑮ ㉜ ㉝ ㊲ ㊳
3	⑯ ⑰ ⑱ ㉒ ㉓ ㉔	㉒ ㉓ ㉔
5	⓪ ① ② ③ ④	
縦の計	42.5	27.5
	6	5
	3	4
	2	1
	1	

両本各六例と五例であるが、関与する資料の数が占める百分率は、国冬本四二・五%、陽明文庫本二七・五%である。うち、両本に共通するものが、「⑭⑮」、「㉒㉓㉔」の形であらわれている。これらの事実は、やはり校訂作業の実態とその過程を如実に示しているものだと考えなければならないが、一方また、河内本と国冬本、あるいは陽明文庫本が、同一祖本の接触の時期があったとか、同一群類の諸本を共有する時期があったとかいう享受の相を推測させるものでもある。

既に指摘したように、帚木の巻の諸本間の本文異同は、桐壺・空蟬・夕顔の巻などに比較すると、一般的に少ない方に属する巻である。だが、その分状の状態は、やはり群と類型とを形成するものであることは、各資料の集計と分析とを通して述べてきたごとくであり、本文系統論の上に示唆するところが大きい。

資料　1　⑧・⑨

第一類

⑧大殿油――大殿あぶら・⑧紙なる――かな・⑧中将わりなく――わりなう・⑧いたしと――いたしなと・⑨よくさま〴〵――ようさま〴〵・⑨事を――事・⑨給ひつ――給うつ・⑨給ふらめ――給へらめ・⑨知る――知らるる

第二類

⑧心地するに――に　国・⑧文どもを――立を　国・⑧引き出で――中将引き出て　国・⑧と許し――とて許し　陽・⑧書き交しつつ――書き交して　国・⑧深く――深う　陽・

第三類

⑧ついてに近き――中についてに近き　国・

第四類

⑧色々の紙なる――ナシ　国・⑧さりぬべき――さるへからん　国・⑧見せん――見せきこえん　陽・⑧べきもこそ――人にもこそ　国・⑧思されん――思しめさん　陽・思しべからん　国・⑧数ならねど――数ならぬ　陽・数ならすとも　国・⑧つけて――つけては　国・⑧つゝも――つつ　陽・⑧夕暮などのこそ――夕へのなとこそは　国・⑧見所は――見所　陽・⑧などに――には　国・⑧散らし給ふべくもあらず――給はすことに御心とまるをは　国・散らし給ふへきにもあらす　陽・⑧給ふへかめれは――給つれは　国・

⑨よく――よくそ　国・⑨こそ侍りけれ――こそは侍りけれ　国・⑨心あてに――ナシ　国・⑨もあり――こともあり　国・⑨思ひ寄せて――思ひよそへて　国・思ひませて　陽・⑨疑ふも――疑ふなとは　国・⑨見ばや。さて――見はや　陽・⑨さてなん――さて　国・⑨あらん――ある　陽・⑨難く侍ら――難う侍ら　陽・難から　国・⑨難つくまじき――難なかるへき　国・⑨難く――難う　陽・⑨ある――ありける　国・⑨やうなん――やう　国・⑨うはべ――心はへ　国・⑨うちし――

とりなし　国・⑨随分に――いふに　国・

第五類

⑨問ふ――いふ　陽、国・

第六類

⑧書ども――かんな書とも　陽・かんな書　国・⑧二の町の――これは二の町の　陽・これはこの町の　国・

資料　2　⑩・⑪

第一類

⑩そもまことに――なを・⑩心をやりて――心をやりてわれかしこにうち思ひて・⑩事もあめり――なるへし・⑩心を――心・⑩一つゆゑづけ――ゆゑあり・⑩繕ひて――繕ひ

⑪こと多く――ことも多く・

第二類

⑩貶しめ――貶しめさまに　国・⑩をかしく――をかしう　陽・⑩方――事　国・⑩さて――さても　陽・

⑪我――我も　陽、国・⑪さばかりならん――しかなりなん　国・⑩見えて――見え　国

第四類

⑩見給ふれど、そも――み給つれとも　国・⑩えらびに――えらびには　陽・⑩必ず――必すいり　国・⑩いと――さるへききはいと　国・⑩心――心には　国・⑩おのが――われからこころにうちおもひておのが　国・⑩やりて――やり　国・やりて思ひて　陽・⑩など――なんと　国・⑩あがめて――あかめ　国・⑩聞き伝へて――かきつたへつゝ　国・⑩事もあめり――ともあり　陽・事もおほかり　国・⑩紛るゝ――又紛るゝ　国・⑩すさび――てすさみ　国・⑩事も――事は　国・⑩

方をば――方を　陽・⑩まねびいだすに――まねひいたす　国・⑩然――しも　国・⑩と――とも　国

⑪見劣り――心劣り　国・⑪なべてはあら――なへてにはあら　国・なへてなら　陽・⑪あらん――あらんと　国・⑪片かど――かたたに　国・⑪人はあらん――人あらん　国・人もあらむ　陽・⑪隠るゝ――とかをかくす　国・⑪自然――おもはす　国・⑪品になん――品に　国・

第五類

⑩多かり――多かめり　陽、国・⑩添ひもて――添ひ　陽、国・⑩おどろき――おとろきて　陽、国・⑩程――程は　陽、国・⑩心を入るゝ――心うる　陽、国・⑩いかがは――いかか　陽、国・⑩思ひ――ナシ　陽、国・

⑪誰かは――誰か　陽、国・⑪趣も――趣　陽、国・

第六類

⑪すぐれたるとは――すくれたることとは　陽・すくれたることは　国・

資料　3　⑫・⑬

第一類

⑫丞――そう・⑫言ひ通れる――言ふ・

⑬もとは――本上・⑬受領――さて受領・⑬又きざみ――きさみ・⑬四位――三四位・⑬いやしからぬ――いやしからぬが・⑬ふるまひたる――ふるまひたるは・⑬うちに――うち・

第二類

⑫いふ際――いふ　国・⑫なれば――なりぬれは　陽・⑫分く――みつに分く　陽・⑫人げなき――人けなきあたり　国・

⑬ことも――さまも　国・⑬さはいへど――さいへと　陽、国・⑬時世に――時世　陽・⑬定まりたる――定まれる　国・

⑬上達部よりも——上達部よりは　国・⑬ままに——ままに世のそしりをも　陽、国・

第三類

⑫かみの品——かみ中の品　陽・かみな中の品　国・⑫参れるやかてこの御方のとのゐにとてまいれり——参れりやかてこの御方の御とのゐにまいれり　国・

⑬けはひそふ——けはひいてきそふ　国・

第四類

⑫目立たず——目にもおよはす　国・⑫とて——と　国・⑫くまなげなる——とくまねくなる　国・⑫気色なるも——気色国・⑫ゆかしくて——いふかしくて　陽・⑫置きてか——置きて　国・⑫品——品は　国・⑫身は——身　国・⑫短く——なく　国・⑫まで——にも　国・⑫思へる——思へるに　国・⑫わく——しわく　国・⑫の丞——大輔　国・⑫言ひ通れるを——しれり　国・言ひをるを　陽・⑫定め争ふ——あらそふに　国・⑫ども——と　国・

⑬世人の思へることも——ナシ　陽・⑬もとは——もと　国・⑬時世にうつろひて——身にしみよに　国・⑬ぬれば——しつれと　国・⑬事ども——事も　陽・⑬なめれば——なれは　国・⑬とり〳〵に——とり〳〵　陽・⑬にかかづらひ営みて——をいとなみてかゝつらひ　国・⑬も又きざみ——ひと　陽・⑬又さざみきざみありて——ナシ　国・⑬品——しれ　国・⑬なまなか——中〳〵　国・⑬非参議の——いやしからぬ　国・⑬世の——世　陽・⑬いやしからぬ——いやしからぬに　陽・いやしからす　国・⑬ふるまひたる——ふるまひたるさま　国・⑬うちに——うちは　国・⑬など——ナシ　国・⑬ままに——心のかきりにことなる　国・

第五類

⑬根ざし——根さしも　陽・国・

第六類

⑬無かめる――をさ〳〵無かへかめる　陽・をさ〳〵無かるへかんめる　国・

資料　4　⑭・⑮

第一類

⑭はぶかず――はふかすことにいたはらず・⑭品――品に・⑭出でけん――出てけむ・⑭ことと――ほとと・

⑮こそ――なとこそ・⑮いたく――いたう・⑮かたかどにても――なとは・

第二類

⑭も――ためしとも　国・⑭なんなり――ななり　陽・⑭仰せらる――仰せらるる　陽、国・⑭けはひ――けはひことなる事なく　国・⑭うちおき――すへてうちおき　陽、国・

⑮人に――人も　陽・⑮知られず――知らす　陽・国・⑮見え――げにと　陽、国・⑮宣ふにや――宣ふ　陽・

第三類

⑮ありとしも――ありとし　国・

第四類

⑭かしづける――かしつきたる人の　陽・⑭などの――なと　陽・⑭おひ出づる――おもひいへる　国・おひ出つると　陽・⑭あまた――ナシ　国・⑭思ひかけぬ――ナシ　国・⑭とり出づる例――あるたくひむかしもいまも　国・⑭ども――いと　陽・ナシ　国・⑭すべて――さらはすへて　国・⑭なんなり――か　国・⑭給ふを――給へは　国・⑭心得ず――ナシ　国・⑭憎む――までも　国・⑭もとの品――人のしなに　国・⑭後れたらんは――後れたらんはた　陽・⑭もいはず――えもいはず　国・⑭けんと――けん　国・⑭うちあひて――又うちあひ　国・⑭べきことと覚えて――こととみえて　国・⑭心も――心は　国・⑭なにがし――なにかしら　陽・⑭程――しかはかり　国・⑭上が上は――みなかゝみ　国・

⑮侍りぬ――侍なん　国・⑮人に――人の　国・⑮あばれ――あれ　国・⑮閉ぢられたらん――うちこもれらん　陽・⑮限なく――限もなく　国・⑮覚えめ――覚ゆへけれ　国・⑮いかではた斯かりけんと――すへていかでか侍りけん　国・⑮違へる――給へる　陽・違ひぬる　国・⑮あやしく――あやしう　陽・⑮わざなる――わさなれはよ　陽・わさなれ　国・⑮老い――ねひ　国・⑮物むつかしげに――物むつかしく　国・⑮にくげに――にくさけに　国・⑮はかなく――はかなう　陽・⑮事わざも――ことはにも　国・⑮いかゞ――いかに　国・⑮をかしからざらん――をかしからん　国・⑮方にて――方に　陽・⑮物をば――物をや　陽・⑮思ひて――思いてて　国・

第五類

⑭と中将――とて中将　陽、国・

⑮めづらしくは――めつらしく　陽、国・

第六類

⑭はぶかず――はふかすことにははからす　陽・はふかすははからす　国・

資料　5　⑯・⑰

第一類

⑯思ふに――思へる・⑯世を――世なれはまして・⑯おぼすべし――おほす・⑯御衣ども――御衣・⑯しどけなく――しとけなう・⑯めでたく――めてたう・⑯となるべき――ナシ・

⑰べきならねは――わさならねは・⑰ゆづらふ――ゆづろふ・⑰多かる――多かりける・⑰見合はせん――見合はせむ・⑰ばかりに――はかり　⑰同じく――同しう・

第二類

⑯さま〳〵――このついてにさま〳〵　国・⑯給ふ――給へり　国・

⑰様にもや――様もや　陽、国・

第三類

⑯君はこころのうちに――君は御こころのうちに　国・⑯飽くまじく――飽くましう　陽・⑯えらはんには――えらふには

国・⑯いてむ――いてん　国・

第四類

⑯とや心得らん――と心ふれは　国・⑯いでや――いて　陽・⑯と思ふに――にと思ふ　国・もに　陽・⑯どものなよゝか

なる――なとのなよらかなる　国・⑯ほかげ――かけ　国・⑯ため――かため　国・⑯上が上を択り――神よりあまくたり

国・⑯ても――て　陽・⑯の人――なる人　国・⑯上ども――上なと　国・⑯合はせつつ――合はせて　陽・⑯頼むべき――

頼む　陽・⑯中にも――中に　国・⑯かためと――かため　国・⑯なるべき――なるべきに　国・⑯まことのうつはものとな

るべきを――まことに　国・⑯には――は　国・

⑰一人二人――一二人　陽・ひとひとりふたりか　国・⑰ならねど――かたならねと　陽・⑰家の内の――家の　陽・⑰す

べき――せん　国・⑰多かる――に多かり　国・⑰べき――べくしたる　国・⑰少きを――少きおり〳〵　国・⑰すかび――

おこり　国・⑰有様――心　陽・⑰見合はせんの好ならねど――見しらんかいひもてゆけは　国・⑰ひとへ――ひとつ　陽・

ひとり国・⑰べき――はかりの　国・⑰心――心ち　陽・⑰択り――思　国・⑰思ふ――思ふかた　国・

資料　6　⑱・⑲

第一類

⑱ゆかしき――いふかしき・⑱かたち――ところせくおもふたまへぬにたにかたち・⑲まねばんやは近くて――まねひかた

きも・

第二類

⑱さて――ナシ　陽・

⑲籠められ――たわめられ　国・⑲につけ――るふるまひ　国・⑲見ん――む　陽・

第三類

⑱もてなしおもひて――もてなしおもふ　国・⑱言少ななるにこころのうちをは――言少ななるにこころのうちには　国・

⑲たわめられ――（た）をめられ　陽・

第四類

⑱捨て――すき　国・⑱人は――人はめやすく　国・⑱見え――みゆ　国・見えて　陽・⑱さてた――さ　国・⑱たもたるゝ――もたるかたは　国・⑱ため――かた　国・⑱心にくく――心にくくそ　国・⑱なり。されど――わさなれと　国・⑱見給へ――み給　陽・⑱なしや――なし　国・⑱上なき御択びには――おほえ　国・⑱人かは――人か　陽・⑱給はん――給らん　陽・⑱おのがじしは塵も――おかしきはちり　国・⑱たぐひ――たらひ　国・⑱身を――身をも　陽・⑱言択りをし――（事）はりを　陽・ナシ　国・⑱思はせつつ――思はせて　国・⑱待たせ――待たせて　国・⑱聞くばかり――はかりに　陽・にてはかり　国・

⑲あまり――あまりなまめき　国・⑲あだめく――あためきて　国・⑲是を――是をは　陽・⑲事が中になのめなるまじき――ナシ　国・⑲かたは――かたはし　国・⑲すぐし――すくまし　国・⑲ついでの――ことのついてにも　国・ついて　陽・⑲方――方なん　国・⑲見えたるに――見えたる　国・⑲びさうなき――ひんそうなき　陽・⑲たる後見――たらん後見　国・⑲人――たゝ人　国・⑲とまる――とまらん　国・⑲近くて――ちにして　国・⑲まねばん――まねひせん　陽・

第五類

⑲公私の――公私　陽、国・

資料　7　⑳・㉑

第一類

⑳さしぐみ――さしくまれ・⑳あはつかに――いとあはつかに・⑳児めきて――児めき・

第二類

⑳独言たるゝ――独言つ　陽、国・⑳口惜しからぬ――口惜しからざらん　陽・⑳心地すべしげに――心地すべきを　国・⑳見るべきを――つへし　国・

㉑いたく――いたう　陽、国・㉑あまり――あまりの　陽・

第三類

⑳うちかた笑まれ――うちもかた笑まれ　陽、国・

第四類

⑳らんに――らん人に　国・⑳語りも――語り　国・⑳腹立たしく――はたゝしく　国・⑳一つに――ひろき　国・⑳あまる事など――あまれる事なれと　国・⑳多かる――ことわさにつけておほかた　国・⑳思へ――思ふ　国・⑳人知れぬ――人知れす　陽・⑳あはれとも――ナシ　国・⑳あはつかに――心もえす　国・⑳たらんは――たらんなと　国・⑳柔かならん――柔かになりをけらん　国・⑳心地すべし――心地すへしと思ふに　陽・⑳向ひて――向ひ　国・⑳程――人　国・⑳さても――ナシ　国・⑳事を――事　国・⑳言ひ――言ひに　陽・⑳わざ――事　国・

㉑まめごとにも――まめまめしくも　国・㉑我心と――心に　国・㉑思ひ得る――思ふいたり　国・㉑事なく――なく　国・㉑深き至りなからんはいと口惜しく――くちをしからんをは　国・㉑口惜しく――口惜しう　陽・㉑なほ苦しからん――く

ちをしからん　陽・㉑少しそば〳〵しく――なまほえ〳〵しく　国・㉑心づきなき人の――心につかぬものの　国・㉑つけて出栄するやうも――いらへはえすへきやう　国・㉑など――なとこの　国・㉑言ひも――はおもひ　国・㉑いたく――いといたう　国・㉑をば――をも　陽・㉑ならん――ならむ　陽・みえむ　国・㉑をぞ――をなん　国・㉑たのみ所――たのみと国・たのもし所には　陽・㉑思ひ――心にたのみ　国・㉑ゆゑよし――ゆゑ　陽・㉑心ばせ――心はへ　陽・㉑添へたらん――添へらん　陽・㉑よろこびに――ようい　国・㉑少し――ナシ　国・㉑後れたるかたあらん――後れたらむかたあらむ陽・後れたらむ　国・㉑強ちに求め加へじ――もとめられわふましたゝ　国・

第五類

⑳いかがは――いかか、国・⑳心もとなくとも――ナシ　陽、国・⑳あだごと――あたわさ　陽、国・

資料　8　㉒・㉓

第一類

㉒づくり――つくりて・㉒とゞめて――見ととめて・㉒ぬるをり――ぬ・㉒聞きて――聞きて待しに・㉒かなしく心深き――かなしかへい・

㉒いと――いとたけく・㉒あたら――あたらしき・㉒え念じ――念し・

第二類

㉒うはべ――ことかたのうはへ　国・㉒見――見きき　国・㉒忍びて――おもひ忍ひて　国・㉒いはん――いはむ・国・㉒方なく――方なくて　国・㉒歌を――歌　陽、国・

㉓君の――なを君の　国・㉓御心――御心さし　国・㉓あはれなり――ふかかり　国・㉓御身を――御身なりや　国・㉓自ら――自らも　陽・㉓あへなく――あへなきに　国・㉓うちひそみぬかし――うちひそみぬ　国・

第四類

㉒所だに——心たに　国・所たにも　陽・㉒うはべの——うはへ　国・㉒もてつけ——つけ　国・㉒わざを——ことに　国・㉒事——ナシ　国・㉒さまに——やうに　国・㉒上は——うはへ　陽・ナシ　国・㉒みさを——みさをも　国・㉒思ひ——うらみ　国・㉒言の葉——言の　陽・㉒置き——かけ　国・㉒忍ばる——忍はれぬ　国・㉒かたみを——かたみ　国・㉒深き——こ深き　国・㉒山里——山里の　陽・㉒をりかし——を　国・をり　陽・㉒女房——女房たち　国・㉒読みしを——ナシ　国・㉒聞きて——聞きほれてしかあらんこそ　国・㉒いと——いとかなしく　国・㉒あはれにかなし——あはれなるへけれ　国・㉒さへなん——さへ　国・㉒思ふには——思ふに　国・㉒かるゝしく——かるゝしう　陽・

㉓隠れて——隠れしはし　国・㉓人を惑はし——人をもおもひ惑はせ　国・㉓心を見んとする程に——わか　国・心をも見んとする程に　陽・㉓物思ひになる——物思ひせん　国・思ひになる　陽・㉓あぢきなき——あちく心ならぬ　国・㉓ほめ立て——め立て　国・㉓あはれ——あはれに　国・㉓進みぬれば——進みぬるときには　国・㉓やがて尼——尼なと　国・㉓程——人　国・㉓いと——いといたく　国・㉓思へらず——をもほへす　陽・㉓思し——思ほし　陽・㉓やうに——ナシ　国・㉓来——うち　国・㉓とも——のみ　陽・しも　国・㉓男——をとく　国・㉓落せば使ふ人古御達など——落すときに　国・㉓など——とふるこたち　国・㉓かき——かい　陽・㉓こぼれ——をち　国・㉓毎に——毎には　国・㉓念じ——念ぜ　陽・ナシ　国・

第六類

㉓かへり見す——へすむ　陽・かへりすむ　国・

資料　9　㉔・㉕

第一類

㉔取りたらんもやがて――取られても・

㉕見放ちたるも――ナシ・㉕心やすく――心やすくおほとかに見はなつ・

第二類

㉔事多かめる――事も多かんめる　陽・㉔給ひつべし――給覧　国・㉔絶えぬ――なを絶えぬ　陽・㉔中こそ――中のみこそ　国・㉔契深く――契たえす　国・㉔うつろふ――おもひうつろふ　国・

第三類

㉕いとほしくもあへからん人もさてそのたちろきに――いとほしくもあへからん人をさてそのちからに　国・

第四類

㉔汚し――つきなし　陽・㉔かへりて――なかなか　陽・ナシ　国・㉔ぞ覚ゆる――覚ゆるを　国・そきこゆる　陽・㉔絶えぬ宿世――たらぬ宿世も　国・㉔浅からで――ありて　国・㉔なさで――なさす　国・㉔取りたらんもやがて――取れらんさて　国・㉔その思ひ出恨めしき節あらざらんや悪しくも善くも――ナシ　陽・　㉔その――その中を　国・㉔あらざらん――事あらし　国・㉔悪しく――あやしく　国・㉔とあらん折も――あらん折も　陽・とあらん時　国・㉔きざみをも――すさひをも　陽・すさみを　国・㉔又――又すこし　国・㉔背かんはた――そむかへは　国・㉔をこがましがりなん――をこがましきことありぬへし　国・㉔うつろふ方あり――ことかたにうつる　国・㉔いとほしく――いとほしう　陽・

㉕絶えぬ――ある　陽・㉕怨ずべき――人のようすへからん　国・㉕さま――さまかほ　国・㉕恨むべからん――恨むへき　国・㉕も憎からず――はことにいてす　国・㉕なさば――なしつつ　国・㉕もまさりぬべし――をまつへきやうあり　国・㉕多くは我が心も――わか心もおほくは　国・㉕人から――人からすこし　陽・㉕あまりむげに――ナシ　国・㉕見放ち――ナシ　国・㉕心やすくらうたきやうなれど自ら――心やすくおほとかに見はなちたる心くるしきことにはあれとあやしなとかゝらむれと　国・㉕方にぞ――方に　国・㉕例――たとへ　国・㉕あやなし――あえなし　陽・㉕かと――ことかなと　国・㉕

うなづく――うなつきてこれにことよりぬかし　国・㉕をかしともあはれとも――をかしくあはれに　国・

第五類

㉔しめる――しつめる　国、陽・㉔相添ひて――やかて相添ひて　国、陽・㉔おかれじやは――おかれしや　国、陽・

㉕も心やすく――心やすく　国、陽・

資料　10　㉖・㉗

第一類

㉖さしも――さしもえ・㉖のどやかに――のとかに・㉖ひゞらき――ひゝち・㉖木――こ・

㉗難なく――ななく・

第二類

㉖心――心の　国、陽・㉖あらじ――あるまし　国・㉖心――心に　国・

㉗臨時――りうし　陽・㉗つけつゝ――つけて　国、陽・㉗様をかへて――ナシ　国、陽・㉗次々に――次々　国・㉗一際――ひとへに　国、陽・㉗目――人の目　陽・㉗目――目を　国、陽・

第三類

㉗されば みたりなにくれのこはこやうのものはさまをかへつつしいてたるもけに――されはみたるなにくれのこはこなとやうの物はさまをかへつつしいてたるもけに　陽・なにくれのはこやうのものはさまをかへていかめしくもけに　国・

第四類

㉖なくて――なくてたに　国・㉖さし直してもなどか見ざらんと覚え――さし直ししつめてもみてんとおほい　国・㉖あらん――あらむ　陽・㉖姫君は――姫君を　国・㉖定――御定　陽・㉖思へば――思ふは　国・㉖君の――君　国・㉖ねぶりて

——ねふりつつ　国・㉖詞も交ぜ給はぬを——詞ませ給はねは　国・㉖さうざうしく——ナシ　陽・㉖ひゞらき——いひ　陽・ナシ　国・㉖この——ナシ　陽・たたこの　国・㉖果てん——えん　国・㉖思せ——大せ　陽・ナシ　国・㉖木の——木　陽・

㉗よろづの物を心に任せて作り出すも臨時の弄び物のその物と跡も定まらぬはそばつき——ものゝやうをしいてたるにもそはめにされはめるあとなきもののすかたはむしんの心にきかせてしいたす　国・㉗ざればみたるも——ナシ　国・㉗しつべかり——みつへかり　国・㉗時——時々　国・㉗今めかしきに——今めかしき　陽・ナシ　国・㉗目移りてをかしきもあり大事として誠にうるはしき——目移ることはえさらぬ　国・㉗調度の飾とする——調度飾とするやう　国・調度の飾とするかえさらす　陽・㉗やうあるものを——をなん　陽・やうなして　国・㉗事——事を　陽・㉗なほ誠の物の上手は様ことに——上すはなをかたきことに　国・㉗分れ侍る又——侍　国・㉗ふとし——ナシ　国・㉗見及——えみを　陽・㉗物は——は　陽・

第五類

㉖姫君——姫君の御ありさま　陽、国・㉖あへし——あひし　陽、国・

資料　11　㉘・㉙

第一類

㉘驚かして——驚かし・㉘実に——まことに・㉘見ゆれ——まつは見ゆれ・

㉙給へて・㉙——給へ・㉙申——きこえ・㉙いみじく信じて——いみしうけうして・㉙杖を——杖・㉙あはれ——いとあはれ・㉙心には——心にひとりにしも・

第二類

㉘げに——なとをけに　陽・㉘見え——見えて　陽、国・㉘なつかしく——なつかしう　陽・㉘柔らいだる方などを——柔

らけて　陽・

㉙中将――中将はた　陽・㉙むかひ居給へり――むかひ居たり　国・㉙ついで――ついてに　陽、国・㉙おの〳〵――おのかしゝの　国・㉙聞えさせ――聞え　国・㉙すき――すさひ　陽・

第三類

㉘きよけなれと――きよけたちたれと　陽・㉘うはへの筆かさらぬは――うはへはかりをかさりたるはふと筆消えて　陽・うはへの筆かさらぬをなん　国・

㉙むかひ居たり――むかいたり　陽・㉙おの〳〵――おのかしゝの　陽・

第四類

㉘驚かして――驚かしつゝ　国・㉘実には似ざらめど――よからぬも　国・㉘ぬべし――ぬかし　陽・ぬらむ　国・㉘山のたたずまい水の流れ――せんすい　国・㉘近き――ちかくみる　国・㉘家居有様――家の有様　陽・おもひのほと　国・㉘方などを――ことを　国・㉘すくよかならぬ――すくよかなる　国・㉘気色――たゝすまひ　国・㉘世離れて――世離れたる国・㉘け近き――しけくかき　国・㉘など――なとれいのよきこと　国・㉘上手は――ナシ　国・㉘わろ者は――わろ物ゝ国・㉘所――かた　国・㉘にも――も　国・㉘点長――点こと　国・㉘書き――ひき　陽・㉘見るに――見る　国・㉘誠――よくこ　国・㉘筋を――筋は　陽・㉘得たるは――たるは　陽・いて　国・

㉙見れば――こまかに見るには　陽・㉙実に――実かし　国・㉙よりける――ありける　国・㉙事――事とも　陽・㉙こそ――こそは　国・㉙時――とか　国・㉙気色ばめ――気色めく　国・㉙情をば――情は　陽・㉙まじく――まじくなん　陽・㉙侍る――ナシ　国・㉙すき〳〵しくとも――すこし　国・㉙申侍らん――かたり申さん　国・申あらはし侍らん　陽・㉙君も目覚し給ふ――ナシ　国・㉙中将――中将は　国・㉙つら杖をつきて――ナシ　国・㉙師の世の――ナシ　国・㉙説き聞かせん所の――説ききかせんやうに　国・説き聞かせけんに　陽・㉙所の――わの　陽・㉙心地するも――思ひ給へるを　国・

㉙かゝる――ことの　国・㉙なんありけるはやう――ナシ　国・㉙あはれ――ああれ　陽・㉙いと――ナシ　国・㉙心――心ち　国・㉙この人をとまりに――ひとりに　国・

第五類

㉘多かめる――多くわかるめる　国、陽・㉘細やかに――まめやかに　国、陽・

第六類

㉘みなし――すみなし　陽・すみなと　国・

資料　12　㉚・㉛

第一類

㉚思ひとゞめ――思ひとめ・㉚物ゑんじ――物ゑし・㉚いたく――いたう・㉚なき手――いとなき手・

㉛進める――すくめる・㉛思ひ――思給・㉛やまん――やまむ・㉛も思ひ――いひ・

第二類

㉚よるべ――これをよるへ　国・㉚紛れ――紛れありき　陽・㉚放たで――放たず　国・㉚為にはと――為に　国・

㉛方――方の人　国・㉛さめず――さめかたう　陽・㉛かう――われにはかう　国・

第四類

㉚とも――しも　国・㉚とゞめ――ナシ　陽・㉚侍らず――侍らて　陽・㉚はべりしを――はへりしほと　国・㉚物怨じをいたくし侍りしかば――物しんしをなんたくひなくせし　国・㉚放たで――放たてと　陽・㉚などかくしも――かうしも　陽・㉚て自然に――なとしつゝおもはすに　国・㉚こと――かたのこと　国・㉚心――こと　国・㉚つけて――つけても　陽・㉚うしろみ――うしろに　陽・

㉛事は――事も　国・㉛思へりし――思へる　国・㉛思ひしかととかくに靡きて――とみ侍　国・思ひしかととかく靡きて陽・㉛なよびゆき――なよきゆうに　陽・㉛見や――やみ　陽・㉛繕ひ――ナシ　陽・繕ひもし　国・㉛おもはん――おもはれむ　陽・㉛ままに――ままには　国・㉛けしうはあらず――むなしからすなと　国・㉛心を――さらに心を　陽・心をも国・㉛ず侍りし――ぬくせなん侍りし　国・㉛思ひ侍りしやう――おもふやう　国・㉛怖ぢ――思ひ　陽・㉛なめり――なんめり　陽・㉛おどして――ナシ　陽・おとしおきては　国・㉛この方も少しよろしくもなりさがなさもやめんと思ひて誠に憂しなども思ひて絶えぬべき気色ならばか許り我に従ふ心ならば――かくさかなき事はうせなんわかことにのみなひく人なんあれはまめやかに思ひたえぬへきけしきをみせんに　国・㉛よろしくも――よろしく　陽・㉛さがなさ――さかなさを　陽・㉛やめん――やまん　陽・㉛も思ひ――思ひ　陽・㉛思ひ給へえて――思ひて　陽・思ひ給へて　国・

第五類

㉚とも――しも　国、陽・㉚いとかゝらで――かゝらで　国、陽・　㉚思ひつゝ――思ひなから　国、陽・㉚うるさくて――うるさく　国、陽・㉚ことにも――ことをも　国、陽・

㉛人に――人にも　国、陽・㉛心も――ナシ　国、陽・㉛侍りしかど――侍りしを　国、陽・

資料　13　㉜・㉝

第一類

㉜思ひなりて――思ひならへ・

㉝事を――のちを・㉝数ふれば――数ふるに・

第二類

㉜つらき――うき　国・㉜念じて――ナシ　国・㉜少し――この女少し　国・㉜少し――この女少し　国・

㉝女も――女もれいの　国・

第三類

㉜しへたくる――しえたる　陽、国・

第四類

㉜見せて例の腹立ち怨ずるに――もてなしつつはらたてて　国・㉜おぞましく――おすましく　国・㉜疑ひ――ゑんし　国・㉜長く見えん――をみはてん　国・長く見ん　陽・㉜思は――念ぜ　国・㉜思ひなりて――思ひなして　国・思ひならは　陽・㉜かゝる心――このかくわりなきこと　国・㉜添へて――添えて　陽・㉜人――事　国・㉜賢く――いと賢く　国・㉜かなと――なと　陽・㉜いひそし侍る――いひもそし侍る時　国・㉜なく――すくなく　国・㉜世――おり　国・㉜のどかに――かくのとかに　国・㉜心やましく――心やましう　陽・

㉝折を――を　陽・㉝けんと――けん　陽・㉝苦しく――苦しう　陽・㉝あるべけれは――あへけれと　国・㉝あると――あなると　国・あるなと　陽・㉝事ども――事　国・㉝侍る――侍る時　国・㉝一つを――一つをなん　国・㉝つきぬれば――つきぬるは　国・㉝にもあらず――にあらす　国・㉝官位――官位も　陽・㉝身なめり――身なむめり　陽・㉝まかでぬ――たちいてぬ　陽・

第五類

㉜あるべき――思ふへき　国、陽・㉜思ひ給へて――思ひ給て　国、陽・

㉝いふに――いふ時に　国、陽・㉝交らひを――交ろひ　国、陽・㉝つけてかは――つけてか　国、陽・

資料　14　㉞・㉟

第一類

㉟解けなん――解けん・㉟思ひ給へ――思ふ給へ・㉟衣ども――衣・

第二類

㉞消息も――消息なとも　国、陽・㉞遣さす――しはへらて　国、陽・㉞旅寝――旅寝も　国・㉞気色ばめる――気色はみうちそはむく　国・㉞あたりは――あたりも　国・

㉟払ひつゝ――払ひつゝまかてゝ　国・㉟大いなる――ともあたゝかなるへく　国・㉟うちかけ――ふすへかけ　国・㉟ばかりやと――はかりやなと　国・㉟女房ども――女房なと　国・㉟歌――歌なと　国、陽・㉟詠まず――詠みをかす　国、陽・㉟せで――なくて　国、陽・㉟情なかりしかば――おほつかなければ　国、陽・㉟あへなき――あえなき　陽・㉟心――心に　国、陽・㉟ありけんと――ありけんなと　国、陽・

第四類

㉞さすがに――さすか　陽・㉞誠には――誠に　国・㉞事――人　陽・物　国・㉞思ひ給へず――思はす　陽・㉞所にて――所に　国・㉞又――ナシ　陽・㉞寒くやと――寒くやなと　国・㉞給へられ――給へ　国・㉞気色も――気色　国・

㉟日頃――こころ　国・㉟給へしに――給へたるに　陽・㉟引き上ぐべき物の帷などうち上げて――ナシ　陽・㉟上げて――かけて　国・㉟渡りぬる――渡りぬ　陽・㉟ひたや――ひとえ　国・

第五類

㉟壁に――ナシ　国、陽・

第六類

㉞家路と思はん――いつくと思ふへき　陽・家路と思ふへき　国・

㉟答へ侍り――つたえ侍り　陽・つたへ侍る　国・

資料 15 ㊱・㊲

第一類

㊱捨てん――捨ててん・㊱改めん――改めむ・

㊲世と――世そと・

第二類

㊱尋ねまどはさんとも――ナシ　国・㊱忍びず――忍ひ　国・㊱ありし――ありし心　陽・㊱のどかに――のとかに見えぬへく　国・㊱はかなく――そこはかなく　国・㊱なり――わつらひてなくなり　国・

㊲かひなから――かひなくはあら　国・㊲たるに――たらんに　国・㊲方――方をもととして　国、陽・㊲たり――たるけしきなり　国、陽・㊲いふも――いふともなを　国、陽・㊲ぬは――ぬもてなしには　国、陽・

第三類

㊱そこはかなく――こそそこはかなく　陽・㊱わつらひてなくなり――わつらひあつかひてなくなり　陽・

第四類

㊱思ひ侍りしに着るべき物常よりも心とゞめたる色合しざまいとあらまほしくてさすがに我が見捨てん後をさへなん思ひ遣り後見たりしさりとも絶えて思ひ放つやうはあらじと思う給へてとかく――ナシ　陽・㊱思ひ侍りしに――いひ侍りしかと　国・㊱思う給へて――思う給て　国・㊱背きもせす――ナシ　陽・㊱侍りしを――侍りしかと　陽・㊱さんとも――せと　陽・㊱え思ひ――思ひ　陽・㊱思ひ給へ――思ひ侍　陽・㊱改めん――改め　陽・㊱いはす――いひ侍らす　国・㊱いたく――いたう　陽・㊱思ひ――物思　国・㊱しかは――しか　陽・

㊲覚え――思　陽・㊲ひとへに――人を　国・㊲たらん――侍らむにうしろやすくはちみるましかりし　陽・てひとへにうしろやすき　国・㊲にてありぬべくなん思ひ給へ出でらるゝ――なる女またみたまへす　国・㊲べくなん――べく　陽・㊲あ

だごとをも――ことにつけても　国・㊲劣るまじく――劣るましう　陽・㊲いとあはれ――あはれ　陽・㊲中将その――ナシ　国・中将　陽・㊲方を――事を　国・方は　陽・㊲あらしはか――ナシ　陽・㊲さあるに――さるに　国・さある　陽・

第五類

㊲うるさく――うるせく　国、陽・㊲棚機の――棚機は　国、陽・㊲あえまし――あらまし　国、陽・㊲錦には――錦こそ　国、陽・㊲花紅葉――事花紅葉　国、陽・

資料　16　㊳・㊴

第一類

㊳べくは見えず――ましくおほえ侍て・

㊴あひ乗りて侍れ――乗りていつれ・㊴ありけん――ありけむ・㊴なりける――なりつる・

第二類

㊳手つき口つき皆たどたどしからず見聞きわたり侍りき――おほめかしからす　国・㊳侍りしかば――なとありしかは　国・㊳こよなく――いとこよなく　国、陽・㊳この――かの　国、陽・㊳には少し――ままにはた少し　国、陽・㊳事は――事見え　国・㊳うち頼む――えうち頼む　国・㊳侍る程――侍し程　国・

㊴渡り――渡りて　国、陽・㊴あはれ――けにあはれ　国・㊴げに見え――見え　国、陽・

第三類

㊳事見え――事は見え　陽・

第四類

㊳同じ――その同し　陽・㊳頃――ころをひ　国・㊳まかり――より　陽・㊳ありと――ありなとも　国・ありとなん　陽

・㊳うちよみ――うちかみ　国・㊳見聞き――みきく　陽・㊳見侍――侍　陽・㊳侍りき――侍りしを　陽・㊳後――後は　国・㊳ぬるは――ぬる　陽・

㊴この女――その女　国・㊴家はた――家は　国・㊴池の――池　陽・㊴ぬかし――ぬるかし　陽・㊴もとよりさる心を交せるにやありけん――ナシ　陽・㊴いたく――いたう　陽・㊴ものに――らんに　国・㊴見る――見るに　陽・㊴きほへる――にほへる　陽・㊴笛――笛を　陽・

第五類

㊴けらし――けるらし　国、陽・

㊴月――月の　国、陽・㊴道なりければ――道なれは　国、陽・

第六類

㊳ぬべく――ぬへく侍き　国・ぬへく侍に　陽・

資料　17　㊵・㊶

第一類

㊵調は――調はた・㊵月――きく・㊵わろかめり――わろかんめり・㊵はやす――やはす・㊵あざれかゝれば――あされかくれは・

㊶思う――思ふ・

第二類

㊵ととのへたりける――ととのへたりけるを　国・㊵ある時――ある時に　国・

㊶ぞなき――もなし　国、陽・㊶と――なと　国・㊶給へんには――給へしを　国・

第四類

㊵うるはしく――うるはしう　陽・㊵程――ナシ　陽・㊵あらず――あらざりき　国・㊵簾――みす　陽・㊵声――ね　陽・㊵いたく――いたう　陽・㊵簾――みす　陽・㊵聞き――ひき　陽・㊵いたく――いたう　陽・

㊶声いたう――いたうこゑ　国・㊶に調へて――の調へに　国・㊶今めかしく――今めかしう　陽・㊶爪音――爪音にくからすかきならしたる　国・㊶まばゆき――はゆき　陽・㊶し侍りし――侍りし　国・㊶ざればみ好きたる――されたる　国・

㊶限りはをかしく――限りをかしう　陽・㊶ぬべし――ぬへしや　陽・㊶よすがと――よすかに　国・㊶頼もしげなく――ナシ　陽・㊶過いたりと――過したりしに　国・

第五類

㊵程――時　陽、国・㊵物柔かに――柔かに　陽、国・㊵月――秋の月　陽、国・㊵紅葉こそ――紅葉なん　陽、国・㊵跡もなけれ――跡もなき　陽、国・

第六類

㊵調べ――よく調へ　陽・いとよく調へ　国・

資料　18　㊷・㊸

第一類

㊷思う――思ふ・

第二類

㊷怪しく――あやうく　国、陽・㊷見ゆる――する　国・㊷露など――露なとやう　国、陽・㊷が程――の程　国・㊷女に――女には　国、陽・㊷君――君も　国、陽・

㊸長らふ――さしも長らふ　国・㊸としも――とは　国・㊸たのめる――たのむ　国・㊸けしき――けしきなと　国・㊸をも――あれと　国・

第三類

㊸思へら――思えら　国・

第四類

㊷事を――事　国・㊷時――おり　国・㊷落ち――おられ　陽・㊷のみこそ――なとこそ　国・㊷をかしく――をかしう　陽・㊷今さりとも――さりともよしいま　国・㊷あやまちして――あやまちし　陽・㊷例の――又　国・㊷少し――ナシ　国・

㊸はしたなかりける――はしたなきめみける　国・㊸打笑ひ――すこし打笑ひ　国・㊸おはさうず――給　国・㊸ものの――ナシ　陽・㊸さても――さて　国・㊸長らふ――さて長らふ　陽・㊸もし――も　陽・㊸思う給へ――思は　国・㊸ままに――にそへて　国・㊸しかば――侍て　国・㊸たのむ――そのたのむ　国・㊸うらめしと――うらめしく　国・㊸事もあらん――らん　国・㊸おばゆる――おもふ　国・㊸折々も侍りしを――折々侍りしかとよう　国・㊸朝夕に――朝夕　国・㊸見えて――見せて　陽・

第五類

㊷頼もしげなく――頼みかたく　国、陽・㊷侍りなむ――はてなん　国、陽・㊷見ん人――見る人　国、陽・㊷事とは――事と　国、陽・

㊸なにがし――なにかしか身に　国、陽・㊸べかりし――へき　国、陽・

資料　19　㊹・㊺

第二類

㊹こそはと――こそはなと　国・㊹らうたげなりき――らうたけなりしかは　国・㊹うたてある――こころつきなき　国・㊹心に――心には　陽・㊹久しく――久しくほとへ　国・

㊺おぼえ――ナシ　国・

第四類

㊹ありきかし――ありしを　国・ありかし　陽・㊹親も――親なとも　国・㊹触れて――触れ　陽・㊹思へる――思給へつる　国・㊹さまも――なまなと　国・㊹かう――かく　陽・㊹見給ふる――見給えつる　国・見給　陽・㊹憂き――ナシ　陽・㊹知らず――知らて　国・㊹消息など――消息　国・㊹久しく――久しうなり　陽・㊹心細かり――いと心細かり　国・㊹なども――の　国・なとの　陽・㊹ありしに――なりしなとに　国・㊹涙ぐみたり――涙くめり国・㊹問ひ給へば――とへは国・

㊺露しげき――露けき　陽・㊺色――花　国・

第五類

㊹情なく――あやしう情なく　国、陽・

㊺なかりき――なかりけり　国、陽・㊺や――やとて　国、陽・㊺まづ塵をだになど――塵をたになとまつ　国、陽・

資料　20　㊻・㊼

第一類

㊻涙を漏らし――涙・㊻恥しく――ナシ・㊻見えんは――見えむは・㊻あくがらさざらまし――あくかれさらまし・

㊼宣へる――宣ひつる・㊼なめれ――なンめれ

第二類

㊻世――そら　国、陽・㊻思ひまつはす――うらみまとはす　陽・

㊼今も――今に　国、陽・㊼えこそ――えなん　国・㊼聞きつけ――聞きいて　国・㊼今――今は　国・㊼見んには――見むには　陽・㊼よく――よう　陽・

第三類

㊻うらみまとはす――うらみたてまつらす　国・

第四類

㊻言ひなし――言ひ　国・㊻まめ〳〵しく――まめ〳〵しう　陽・㊻さま――けしき　陽・㊻恥しく――恥しう　陽・㊻隠して――隠し　国・㊻つらきをも――つらきを　国・㊻わりなく――いとわりなく　国・㊻苦しき――つつましき　陽・㊻物――物には　国・㊻思ひたりしか――思ひたれ　国・㊻おき侍り――侍り　国・㊻失せ――失せ侍　国・㊻思ひ――思侍　国・㊻あくがらさざらまし――あくからさらまし　国・

㊼しなし――し　陽・㊼侍りしかばいかで尋ねんと思ひ給ふるを――おもし侍しを　国・㊼思ひ給ふる――思へ侍へる　陽・㊼侍らね――ぬ　国・㊼これこそ――これこそは　陽・これこそはかの　国・㊼ためし――もののためし　国・㊼思ひ離れず――思はなたす　国・㊼人やりならぬ――人やりならす　国・ナシ　陽・㊼あらんと――あらんなと　国・㊼思ひいで――なを思ひいて　国・㊼かたに――かたは　国・㊼ありなんや――ありなん　国・

第五類

㊻さすらふらん――さすらふらんかし　国、陽・㊻煩はしげに――煩はしう　国、陽・

㊼思ひける――思ひけるを　国、陽・㊼あはれ――あはれは　国、陽・㊼折々――さるへき折々　国、陽・㊼これなん――これなんむけににくからて　国、陽・㊼音――音の　国、陽・

第六類

㊼すゝめけん――すめりけん　国・すすめりけん　陽・

資料　21　㊽・㊾

第一類

㊾まだ文章の――文章・

第二類

㊽罪――罪けに　国、陽・㊽ぬるこそ――ぬこれそ　国・㊽かく――かう　陽・㊽よき――よきかたの　国・㊽難ず――すつ　国、陽・㊽いづこ――いつく　陽・㊽又――ナシ　陽・㊽なでふ――なんでふ　陽・㊽何事を――何事をか　国・

㊾侍らざりし――侍りし　国、陽・㊾我が――我　陽・

第三類

㊽いつれとも――いつれも　国・㊽ぬこれそ――ぬそれそ　陽・

第四類

㊽添ふ――添ひぬ　陽・㊽交ぜぬ――させぬ　国・㊽づき――つきて　国・㊽責めらる――責めらるれはなんてう　国・㊽中にはなでふ事か聞し召し所――なかにかかやうの御物かたりにきこしめさるはかりのことは　国・㊽事か――ナシ　陽・㊽侍らん――あることは候らん　陽・㊽頭の君まめやかに――君　陽・㊽遅し――おそし〳〵　国・

㊾侍りし――さふらひし　陽・㊾給へし――給し　国・㊾やうに――ナシ　陽・㊾合はせ――かはせ　国・㊾私ざま――私陽・㊾ざえ――さそ　国・㊾なま〳〵――なみ〳〵　国・㊾恥しく――恥しう　陽・㊾し侍る――し侍り　陽・㊾女ども――女　陽・㊾出でて――出て侍りて　国・㊾我が――和漢　国・㊾もまからず――まからす　国・㊾程に――程　陽・

第五類

㊽つひに――つひにえ　国、陽・㊽佗しかりぬ――佗しかる　国、陽・㊽あらん――おほからん　国、陽・㊽何事――わひて何事　国、陽・

㊾めぐらすに――めくらす　国、陽・㊾給へる――給つる　国、陽・㊾あかすべく――あかすましう　国、陽・㊾許に――いゑに　国、陽・㊾侍りしを――侍しなり　国、陽・㊾うたふ――かたらふ　陽、国・

第六類

㊽疑ひ――うちたゝよはるゝ疑ひ　陽・うかひたゝよはるゝ疑ひ　国・

資料　22　㊿・51

第一類

㊿懐かしき――け懐かしき・

51残を――残・

第二類

㊿教へて――教へ侍て　陽・㊿書き――おさ〳〵書き　国・㊿侍るに――なとするに　国・㊿者――をんな　国、陽・㊿うち頼ま――うちとけ　国・㊿には――に　国、陽・㊿なまわろからんふるまひなど――かたはなるさま　国・㊿見え――おほえ　陽・㊿御ためはか〴〵しく――御ためにはさしも　国、陽・㊿何にか――何にかは　国、陽・㊿なきものは――なきものには　国・

51残を――残　国・51心は――心　国・51をこづき――をこめき　国、陽・51物怨じ――物怨しなと　国、陽・51道理――ことはり　国・

第三類

㊿教へ侍て――教へ侍り　国・

第四類

㊿思ひ後見――うしろみおもひてなん　国・㊿身の――たた身の　国・㊿いと――かくて　国・㊿いふ――いふは　国・㊿むべむべしく――うへうへしく　陽・㊿腰折文――腰折句　国・㊿恩は――恩を　国・恩　陽・㊿恥しくなん――恥しうなと　国・㊿見え――ナシ　国・㊿したたかなる――したたかならん　陽・㊿後見は――後見　陽・㊿も唯――ナシ　陽・㊿我――我もたゝ我御　陽・㊿方――方は　国・

㊿残をいはせんとて――ナシ　陽・㊿すかい――すかし　陽・㊿ざりし――さりける　国・㊿居たる――ゐる　陽・㊿給ふる――給ふ　国・㊿はた――はまた　国・はたさる　陽・㊿すへきに――すへく　国・㊿声は――声も　国・㊿月頃――この月頃　陽・㊿風病――風病の　国・㊿極熱の――極熱のころ　陽・㊿服して――服したれは　国・㊿たまはらぬ――たまえらぬ　陽・

第五類

㊿清げに――清けにはしりかき　国、陽・㊿作る――なと作る　国、陽・㊿ことなど――こと　国、陽・

㊿にものゝ――ころものゝ　国、陽・㊿いふやう――さはやかにいふやう　国、陽・㊿重き――いと重き　国、陽・

資料　23　㊷・㊸

第二類

㊷等――ナシ　国・㊷いひ――いひいてて――国・㊷いらへに――いらへ　国、陽・㊷かは――かはいはれはへらん　国・

㊷時に――ナシ　国・㊷侍りぬるに――侍るを国、陽・

㊸とて笑ひ給ふ――とりくはふるそ　国、陽・㊸をして――をしてかのにほひはかけて又まねひなせそ　国、陽・㊸少し――ゑせ物かたりなり　国、陽・㊸僅か――わが僅か　陽・

第三類

㊸思ほし――おほし　国・

第四類

㊷かは――かはいらへむ　陽・㊷何と――何ことを　国・㊷いとほし――いとをしう　国・㊷はた侍らねば――は侍らねと　国・㊷添へる――添ひ侍る　国・㊷あやなさ――あえなさ　陽・あやなき　国・㊷と言ひ――言ひ　陽・㊷走り――走りて　国・

㊸口疾く――口疾う　陽・㊸などは――なと　国・㊸空言――空言を　陽・㊸いづこ――いつく　陽・㊸こそ――こそは　国・㊸向ひ居――むかゐ　陽・㊸むくつけき事――むくつけし　陽・むくつけき　国・㊸よろしからむ――よろしき　国・㊸事を――事　国・㊸事は――事　陽・㊸知れる――知られる　陽・たてしれる　国・㊸残りなく――人に残りなく　陽・残りなく人に　国・

第五類

㊷さるべからん――しかるへき　国、陽・㊷覚えけん――ありけん　国、陽・㊸べきに――へく　国、陽・

資料　24　㊹・㊺

第一類

㊹まんな――まむな・

㊺その折に――その折ふし・

第二類

54道々しき――の道々しき　国・〈「の」小字補入・陽・〉54さとりあかさん――さとりたらん　国・54まなばねど――まねはねと　陽・54あらん――ある　国、陽・54書きすくめ――書きすすみ　国、陽・54あなうたて――いてやあまりなり　国・54このひとの――ここもとの　国、陽・54見えたり――見ゆかし　国・54思はざらめど――かきすくめむとも　国・

55五月の節――五月五日の節なと　国・55九日――九月九日　国・

第三類

54かきすくめむとも――かきすくめんと　陽・

第四類

54なからめ――なかめ　国・54などかは――なとか　陽・　54まんな――かな　陽・54書きて――書き　国・54などし――ナシ　陽・54事――ナシ　国・54まつはれ――まつはれて　国・

55込み――そへ　陽・込みそへ　国・55折々――折　国・折々に　陽・55せねは――せぬも　国・55人は――人　国・55はしたなからん――はしたなかるへし　国・55参る――参らむ　陽・55あした何の――ほとなにと　国・55思ひしづめ――思ひし　国・55宴――え　陽・55まづ難き――まつかたに　陽・55かこち――かたち　国・55つきなき――つき　国・55ならで――なくて　陽・55あべかりける――あるべき　国・55その折――そふおもふし　国・55量らず――量りおもはす　国・

第五類

54さるまゝには――さるまゝに　国、陽・54殊更びたり――殊更ひたりこれは　国、陽・54歌よむ――歌よまん　国、陽・

55節会など――節会　国、陽・

第六類

55かへし――返事　陽・返事を　国・

資料　25　㊻・㊼

第一類

㊻知らず顔――知らぬ顔・

㊼なほ――つしやかになほ・㊼きこえ――かたりきこえ・

第二類

㊻事をも――ことのはをも　国、陽・㊻といふ――なとといふ　国・㊻胸ふたがる――胸ふたかる心ちしたまふ　国・㊻事ども――ろんとも　国・

㊼けしき――ありさまも　国・㊼けはひ――御けはひ　国・㊼御有様――御様　国・㊼恥しげに――恥しとのみ　国・㊼さうざうしくて――さうさうしくおもほして　国・㊼思ひ――みな思ひ　国、陽・㊼かのうち解け――うち解け　国、陽・

第三類

㊼さうさうしくおもほして――さうさうしく思ひて　陽・

第四類

㊻時々――時々を　国・㊻情立た――情たへ　陽・㊻めやすかる――なかなかめやすかる　国・㊻知れらん――知られん　国・㊻事をも――事を　陽・㊻もてなし――たとりなしもてなし　国・㊻すぐす――すく　国・㊻足らず――足えす　国・㊻過ぎ――すくし　国・㊻ものし給ひ――おはし　国・㊻明かし――夜も明かし　国・㊻辛うじて――ナシ　国・㊻給ふも――たまへは　国、給ふは　陽・㊻いとほしければ――いとをしうて　国・

㊼け高く――ナシ　国・㊼人々の捨て難く――ナシ　陽・㊼まめ人――まめかたの人　国・㊼頼まれぬ――頼まれ給ぬ　国・㊼とけ難く――とけ難う　陽・とけ難くつきせす　国・㊼中務――中務の君　国・㊼ぬ若人――ん若き人　国・㊼物語――

物語くはし　国・

第五類・

㊻あべかり――あり　国、陽・㊻無く――無くも　国、陽・

㊼所――事　国、陽・㊼おはしまして――おはします御なをしはかりはかなくひきゝ給て　国、陽・㊼おはす――ゐ給えり　国、陽・

資料　26　㊽・㊾

第一類

㊽牛ながら――ナシ・

㊾思さんは――思さむは・㊾なんうれし――なむうれし・㊾げによろし――きによろし・

第二類

㊽よりは――よりはこなたは　国、陽・㊽ふたがりて――ふたかり　国、陽・㊽けりと――けりと人々　国、陽・㊽きこゆ――きこゆるを　陽・㊽例は――例も　国、陽・㊽二条院にも――二条院も　国、陽・㊽親しく――親しう　陽・㊽きこゆ――きこゆれば　国、陽・㊽入れつ――入れておりぬ　国、陽・

㊾しりぞき――しそき　国・㊾をきゝ――けしきをきゝ　国・㊾後に――後にを　陽・

第四類

㊽暗く――暗う　陽・㊽きこゆ――きこゆれは　国・㊽筋――まち　陽・㊽いづく――いつこ　国・いつかた　陽・㊽にか――に　国・㊽違へん――違へむ　陽・㊽悪しき――あやしき　国・㊽きこゆ――きこへて　国・

㊾外ざまへと――外さまに　国・㊾仰せ言賜へ――仰せらるれ　国・㊾しりぞきて――ナシ　陽・㊾女房――その女房　国

・かの女房　陽・㊾まかり――ナシ　国・㊾にて――侍り　国・㊾人近――けちか　国・㊾からんなん――からん　陽・からなん　国・㊾げに――ナシ　陽・㊾所をと――所をも　国・㊾聞え――きこしめさせ　国・㊾にも――にたゝ　国・

第五類

㊽こよひ――こよひより　国、陽・㊽なりけり――なりけれはいかゝすへき　国、陽・㊽牛ながら――こと〳〵しからて　国、陽・

㊾塞げて――に事よせて　国、陽・

第六類

㊾人走らせ――わつらはしとおもへとひとよはかりはとて人走らせ　陽・わつらはしとはおもへはひとよはかりはとて　国・

資料　27　㊿・61

第二類

㊿俄かに――かみ俄かに　国、陽・㊿東面――東面をとり　国・㊿柴垣し――柴垣しわたし　国・㊿心とめて――心ととめて　国、陽・㊿声々――声々なと　国、陽・㊿いでて――いつへしと　陽・

61音なひ――音なひさやかに　国・61して――きこえて　国・㊿笑ひ――ものうちいひ笑ひ　国、陽・61格子を――格子は　国・61あげたりけれど――あけたりつれと　国・61隈には――隈にはいと　国、陽・

第三類

㊿かりそめのおましところなれとつきつきしく――かりそめのおましところなれはつき〳〵しく　国・

第四類

⑥0おはしましぬ——おはしぬ　国、おはしまします　陽・⑥0人も——人　陽・⑥0水の心ばへなどさる方にをかしくしなしたり——ナシ　陽・⑥0まがひて——まよひて　国・かひ　陽・⑥0人々——人々は　国・⑥0渡殿より出でたる——渡殿なる　陽・⑥0のぞき——のそきて　陽・⑥0酒——酒なと　国・⑥0のどやかに——のとかに　陽・⑥0とりいでて——とりいつへきことなりと　国・⑥0給へる——給し　陽・

⑥1ゆかしく——いふかしくて　国・ゆかしう　陽・⑥1西面にぞ——西面にこそ　陽・⑥1音なひ——音なひさはやかに　陽・⑥1若き——若き人の　陽・⑥1声ども——声　陽・⑥1殊更び——殊更ひきこえ　国・⑥1守心——守きてこち　国・⑥1透影——ナシ　国・⑥1かみ——すきまかみ　国・⑥1隙も——隙　陽・⑥1まめだちて——まめたち給て　国・⑥1さうゞしかんめれ——さうゞしかめれ　陽・⑥1されど——ナシ　国・⑥1よく——よう　陽・⑥1隠れ——まきれ　国・

第五類

⑥1給へるに——給つるに　国、陽・⑥1事ども——事　国、陽・

資料　28　⑥2・⑥3

第一類

⑥2給ひつ——給うつ・⑥2ほほゆかめ——ほほゆがみ・

第二類

⑥2給へば——給へれは　国、陽・⑥2たてまつり——たてまつれ　国、陽・⑥2聞ゆ——ほの聞ゆ——国、陽・⑥2なほ——されはやなほ　国、陽・

⑥3にてあり——にてありく　国、陽・⑥3ぬべく——侍へく　国・

第四類

㊷ずし――すんし　陽・よみ　国・㊷なんかし――なんものを　国・㊷なくては――なくて　陽・
㊸童なる――童　国・童なるか　陽・㊸の程に御覧じなれ――し　陽・の御覧しなれ　国・㊸伊予――このおやの伊予　国・㊸いと――またいと　国・㊸けはひ――けはひまきれす　国・㊸あてはかにて――あてはかにも　国・㊸なるも――あるも　陽・㊸など問ひ――ならんと問ひ　国・なとの　陽・㊸故――ナシ　陽・故右　国・㊸末の――ナシ　陽・㊸かなしく――かなしう　陽・㊸侍りける――侍る　国・㊸よすがに――よすかにて　陽・㊸つき――ナシ　国・㊸けしうは――けしう　国・㊸殿上――おやかりて殿上　国・㊸すが〳〵しうは――すか〳〵とも　国・しか〳〵しくも　陽・㊸ざめる――さめり　陽・㊸申す――きこゆ　国・㊸まうと――まこと　国・

第五類

㊷姫君――姫君の御もと　国、陽・㊷などを――なとをも　国、陽・㊷かかげ――かきなし　国、陽・㊷いかにぞは――いかにそ　国、陽・㊷さるかたの――さる　国、陽・㊷心も――心　国、陽・㊷宣へば――宣へはかしこまりて　国、陽・㊷と――と申　国、陽・

㊸交らひ――交らはせ　国、陽・

第六類

㊷ほほゆがめて――かたゆかみめて　国、かほゆかめ　陽・

資料　29　㊹・㊺

第一類

㊹ものなれと――ものなれなと・

第二類

⑥④奏せし――奏せさせし　国・⑥④いつぞやも――いつそや　陽・⑥④いふものは――いふもの　国・⑥④あはれに侍る――あはれに侍ける　国・⑥④なんど――なと　国、陽・⑥④介――介は　国、陽・

⑥⑤侍らずなむ――侍らずな　国・⑥⑤かの――あの　陽・⑥⑤侍りぬる――侍つる　国、陽・⑥⑥おり――うつろひ　国　⑥⑥臥しつゝ――臥し　国、陽・⑥⑥方――くま　国、陽・

第四類

⑥④後の――後　国・⑥④親を――親　陽・⑥④たりける――たる　陽・⑥④上にも――上に　陽・⑥④置きて――置き　国・て　陽・⑥④出し――も出し　国・⑥④宣はせし――宣はせき　陽・⑥④なれ――なりけれ　国・⑥④不意――ふえう　国・⑥④世の――世陽・⑥④こそ今――そ今　国・⑥④定まりたる――定まれる　国・⑥④きこえさす――きこゆ　国・⑥④いかがは――いかゝ　陽・⑥④なにがし――なにかしら　陽・

⑥⑤ずなむ――すなん　陽・⑥⑤さりとも――さりと　陽・⑥⑤しく今――しう今し　陽・⑥⑤たらんに――たるに　国・⑥⑤かの――猶かの　国・⑥⑤し給ひて――し給ひ　国・⑥⑤下屋――下　陽・⑥⑤おり――ナシ　陽・⑥⑤あへざ――あへす侍　陽・⑥⑤きこゆ――申　国・⑥⑤北――また　国・⑥⑤けはひ――けはひの　国・⑥⑤あはれや――あはれ　陽・⑥⑤いづく――いつこ　陽・

第五類

⑥④申すに――申す　国、陽・⑥④およずけ――およすけて　国、陽・⑥④侍らね――侍らぬ　国、陽・⑥④こそは――こそ　国、陽・

⑥⑤気色ばめる――気色事なる　国、陽・⑥⑤あはれ――いてあはれ　国、陽・⑥⑤たまはる――たまえる　国、陽・

資料　30　⑥⑥・⑥⑦

第一類

⑥⑥いとよく――いとよう・

⑥⑦静まりたる――静まりにたる・

第二類

⑥⑥といふ――ナシ　国・⑥⑥寝たりける――寝たる　国・⑥⑥御有様――御様　国、陽・⑥⑥あぢきなく――あいなく　国、陽・

⑥⑥すぢかひたる――すこしちかひたる　国、陽・

⑥⑦しもに――しもになん　国・⑥⑦まゐらん――まうのほる　国・⑥⑦侍り――侍りつ　国・⑥⑦火はほの暗きに見給へば――ナシ　国・⑥⑦唐櫃だつ――唐櫃めく　国・⑥⑦ものどもを――ものなととり　国・⑥⑦給へれば――給ふ　国・⑥⑦所に入り――ほとにより　国・⑥⑦臥したり――臥したり火はほのくらきに　国・

第四類

⑥⑥寝――ふし　陽・⑥⑥いかに――いと　陽・⑥⑥いふ――いふなり　陽・⑥⑥めてたかり――めてたくおはし　国・⑥⑥のぞきて――のそきても　陽・⑥⑥顔――顔も　国・⑥⑥声――心ち　国・⑥⑥女君は――女君　陽・

⑥⑦いづく――いつこ　陽・⑥⑦湯に――なんゆき　陽・⑥⑦侍りと――ナシ　陽・⑥⑦給へれば――給へは　国・⑥⑦ものどもを――ものとり　陽・⑥⑦置きたれば――置きたる　国・⑥⑦給へれば――給て　陽・⑥⑦所に――ほとに　陽・⑥⑦唯――ナシ　国・

⑥⑦押しやるまで――押しやり給ふに女たゝ　国・⑥⑦つればなん――つれは　国・

第五類

⑥⑥はしに――ここ　国、陽・

⑥⑦かけがね――やをらかけかね　国、陽・⑥⑦試み――はなちて試み　国、陽・⑥⑦衣――衣を　国、陽・⑥⑦中将――いとしのひて中将　国、陽・

資料　31　㊽・㊾

第二類

㊽浅く――浅う　国、陽・㊽けはひ――御けはひ　国、陽・

㊾少し――少しをそ　国、陽・㊾きこゆべきぞ――きこゆへき　国、陽・㊾小さやか――ささやか　国、陽・㊾にぞ――ほとにそ　国・㊾たるにぞ――たるに　国、陽・

第四類

㊽わかれず――もわかれす　陽・㊽や――やや　陽・㊽程と――程　国・㊽ことわり――なことわり　国・㊽うちも――ほとも　陽・㊽浅くは――浅うも　国・㊽宣ひて――ナシ　陽・㊽はたわびしく――はたゝわびしく　国・はたいとわひしう　陽・㊽あるまじき――あさましき　陽・㊽浅ましく――あさましう　陽・㊽侍るめれ――侍れ　国・侍らめ　陽・㊽したなり――したに　国・

㊾かな――ものかな　陽・㊾抱きて――抱き給て　国・㊾人――もの　国・㊾いみじく――いみしう　陽・㊾あさましう――あさまし　国・㊾事ぞと――事と　国・㊾惑はるれど――惑へれと　陽・㊾方――方も　国・㊾人の――人　陽・㊾あらん心も――はいとをしかるへきと心のみ　陽・㊾どうも――とう　国・㊾入り――ふし　国・

第五類

㊽さはりて――かかりて　国、陽・㊽音にも――音も　国、陽・㊽立てず――立てられす　国、陽・

㊾しるべ――しるへある　国、陽・㊾よに――よも　国、陽・㊾寄りたる――寄れる　国、陽・

第六類

㊾のもと――くち　国・くちに　陽・

資料 32 ⑳・㉑

第一類

⑳御迎へ——迎へ・⑳女は——ナシ・

第二類

⑳例の——なにやかやと例の 国・⑳知る——知らる 陽・⑳覚えずこそ——覚えす 陽・⑳思う給へ——思う給へられ 国、陽・

第三類

⑳悩ましげなる——悩ましげなるを 陽・⑳いとかく思し——いとかくおもほし 国・

第四類

⑳迎えに——迎えにを 陽・⑳いと——ナシ 国・⑳あらんあはれ知るばかりなさけ〳〵しく——なさけ〳〵しくあはれ知るはかり 国・⑳なほ——ナシ 国・⑳御心——心 陽・⑳程も——程を 国・⑳いかゞ——いかかは 陽・⑳際と——事に 陽・⑳はべなれ——はへるなれ 陽・⑳かく——ナシ 陽・うしとおもへるさまかう 国・⑳給へるを——給へる 国・給へは 陽・⑳思ひ入りたる様も——思へり 陽・思ひ入りたるも 国・⑳いとほしく——いとほしう 陽・⑳なれば——なれと 国・⑳初事——ほと 国・

㉑給へる——給つ 陽・給 国・㉑心惑ひ——惑ひ 国・㉑まめだちて——まめたちても 国・㉑事——事の 陽・㉑方の——方に 国・㉑いふかひなきに——いふかひなく 陽・㉑思ひて——心つよく思ひて 国・㉑つれなくのみ——つれなく 陽・㉑べくも——へくは 国・㉑強ち——あやにく 国・

第五類

⑳を引き——引き 国、陽・⑳女は——女 国、陽・⑳取うで——取りいて 国、陽・⑳深くなさけなく——なさけなさを

ふかう　国、陽・⑩けはひ――さま　国、陽・⑩まだ――また思ひ　国、陽・
⑪好き心――好き事　国、陽・

資料　33　⑫・⑬

第一類

⑫はあれど――あれと・⑫かう――かく・⑫思う給へ――思ひ給へ・
⑬泣き――なけき・

第二類

⑫思へれば――思ひたれは　国・⑫など――なといと　国・⑫見直し――また見直し　国、陽・⑫仮なる――うかりける
国、陽・
⑬いふもあり――いふ　国・⑬出でて――出てきて　国、陽・⑬いと苦し――苦し　国、陽・⑬気色――御気色　国、陽・

第三類

⑫のちせもやと――のちせをもやとも　国・のちせをもやと　陽・

第四類

⑫あはれなり――あはれけなり　国・⑫心苦しく――心苦しう　陽・⑫ものにしも――ものに　国・⑫思ひ給――思ひなし
給　国・⑫思ひ知ら――知ら　国・⑫おぼゝれ――おほえられ　国・⑫いとかく――いとかう　陽・⑫見まし――も見まし
国・⑫わが――ナシ　国・⑫にて――にても　国・⑫慰め――なさ　陽・ナシ　国・⑫類なく――とりあつめ類なく　国・⑫
げにいと――けに　陽・
⑬守も出で来て――ナシ　陽・⑬夜ぶかく――あれあなかちに夜ふかく　陽・⑬べきかは――へき事にやは　国・⑬などい

ふもあり――といへは　陽・⑬君は――ナシ　国・⑬難く――難う　陽・⑬さしはへては――さしはへて　陽・⑬いかでか――いかにしてかは　国・⑬なども――なと　陽・なとの　国・⑬こと――ナシ　国・

第五類

⑫はあれど――いとをしけれと　国、陽・⑫などかく――なとかう　国、陽・

⑬のいと――もいと　国、陽・

資料　34　⑭・⑮

第一類

⑭思ふに――思ふにも・

⑮影さやかに――かほけさやかに・

第二類

⑭いとすくずくしく――いとはしう　国、陽・⑭あなづる――あなつらる　国・⑭方の――方のみ　陽・⑭あかく――あかう　陽・⑭送り――送りし　陽・

⑮騒かし――騒がしうあはたたし　国・⑮そゝき――いそき　国、陽・⑮あめり――あへかめり　国、陽・⑮艶に――ところからの艶に　国、陽・⑮なきをと――なきを　国、陽・

第四類

⑭色――色は　国・⑭もてなし――ありさまけはひ　国・⑭あなづる――あなつられたる　陽・⑭方の――かみたのみまつ　国・

⑮関の――おきの　国・⑮うちながめ――なかめ　陽・⑮のかみ――ナシ　国・⑮有様を――有様　陽・⑮身に――我身に

陽・⑮やらん――いれん　国、陽・いてん　国・

第五類

⑭はてぬ――あえぬ　国、陽・⑭つきなく――にけなく　国、陽・

⑮給ひぬ――給　国、陽・

資料　35　⑯・⑰

第一類

⑰はべなり――はへり・⑰思せと――思ほせと・⑰なまめきたるさまして――ナシ・

第二類

⑯とみにも――とみに　国、陽・⑯まして――あはれに　国・⑯心の内――ことはまして　国・⑯思ひやり給ふ――思しやる　国・⑯かき絶え――うち絶え　国、陽・⑯中納言――権中納言　国、陽・⑯身――身に　国、陽・

⑰姉――かの姉　国・⑰宣ひ見ん――宣へ侍らん　国・⑰申す――申すに　国・⑰聞き給ふる――聞き給ふるときこゆ　陽・⑰けしうは侍らざるべし――こともなく侍るへかめりし　陽・⑰をかしとは――をかしと　陽・

第三類

⑯いひまつはす――いひまとはす　国、陽・

⑰こともなく侍るへかめりし――こともなく侍るめり　国・

第四類

⑯ことは――こと　国・とには　陽・⑯見集め――集め　国・⑯事――こと葉　陽・⑯いとほしく――ナシ　陽・⑯苦しく――苦しきを　国・苦しう　陽・⑯子は――子はここに　国・⑯させてんや――させよ　国・⑯人――心　国・⑯我――ナシ

陽・

㊼宣ひ――申　陽・㊼姉君――君　陽・㊼もたる――もちたる　陽・㊼かくて――かうても　陽・㊼侍れど――侍れは　国・侍れ　陽・㊼心――心も　国・㊼やうになん――やうにそ　陽・㊼よろしく――よろしう　陽・㊼をかしと――をかしきこと　国・

第五類

㊻程――ころ　国、陽・㊻おはします――おはす　国、陽・㊻思ふらん――かの人の思ふらん　国、陽・㊻思しわびて――思しあまりて　国、陽・

思せど――思せとつれなくて　国、陽・㊼ばかりぞ――はかりこそ　国、陽・㊼もて離れ――いともて離れ　国、陽・

第六類

㊻中の品かな――をかの中のしなにては陽・かなかの中のしなにては　国・

資料　36　㊽・㊾

第一類

㊽問ひ――問ひきき・

第二類

㊽にくしされど――にくくおほせと　国、陽・㊽ざまも――さまなれと見もいれられす　国・㊽霧りふたがりて――めも霧りて　陽・

㊾宣へば――いへは　国・㊾ざりしものを――さりしを　国・㊾申さん――きこえん　国・㊾宣はせ――の給ひ　国、陽・

㊾ぬぞよき――ぬものそ　国、陽・㊾ありけば――よるこころなれは　国・

第四類

㊽給ふさるべき事はいらへ――ナシ　国・㊽よく――ようかたらひ給ふ御ふみたまえりいとあやしうおもへるにこまゝとみゝにあてゝ　国・㊽思ひの――いと思ひの　国・㊽幼心地に――幼き心地に　陽・幼心地にいと　国・㊽深く――深う　陽・㊽女――女むねつふれていと　国・ナシ　陽・㊽はしたなく――はつかしく　陽・㊽ひろげ――ひきひろげ　国・㊽いとおほく――ことといとおほく　国・㊽目も――いと目も　国・㊽霧りふたがりて――めも霧りふたがり　国・

㊾参るとて――ナシ　国・㊾見る――見わく　国・㊾も宣は――も宣はせ　国・㊾いかゞ――いかゝえ　国・㊾思ふに――思ふが　国・㊾いかでか――いかゝ　国・㊾好き――好いたる　国・㊾有様――御有様　国

第五類

㊽いとめでたく――めてたく　国、陽・㊽思ふ――思へり　国、陽・

㊾添へりける――添へける　国、陽・㊾給ひそ――給そかし　国、陽・㊾この子――こ君　国、陽・

資料　37　㊿・81

第一類

㊿て率て――率て・㊿なめり――めり・

第二類

㊿きのふ――きのふも　国、陽・㊿あさまし――めさまし　国、陽・㊿又も――又御ふみ　国・㊿翁よりは――翁より　国・㊿頸細し――頸細なり　国・㊿この――かの　国、陽・㊿短かりなん――短からんな　国・㊿思へる――思へるを　国・

81あつかひ――いたしたてさせ　国・81ありされと――たまはすれと　国・81げに――けによに　国、陽・81なべてにや――なへてや　国、陽・81ぬには――ぬにしも　国、陽・81何にかは――何に　国、陽・81べきなど――へき身そと　国・

第三類

⑧⓪短からんな——短かしな　陽・

⑧①身ぞと——そと　陽・

第四類

⑧⓪君——君は　国・⑧⓪くらししを——こうしにしは　国・⑧⓪赤め——赤み　国・⑧⓪申すに——きこゆ　国・⑧⓪賜へり——賜はり　国・⑧⓪知らじ——え知らじ　国・⑧⓪見し——われは見し　陽・⑧⓪まうけて——えりて　陽・もとめたまひて　国・⑧⓪かく——かう　陽・⑧⓪あこ——君　国・⑧⓪頼もし人は——おやはたのもしけなれと　国・⑧⓪事かな——事　国・

⑧①まつはし——まとはし　陽・⑧①うちにも——うちに　国・⑧①せさせ——せさせて　国・⑧①まことに——まことの　国・⑧①ふみは——ふみ　国・⑧①されど——されとも　陽・ナシ　国・⑧①幼し——はかなし　国・⑧①思へば——もおもほえて　国・⑧①身から——身なから　国・⑧①思ひて——思へは　国・⑧①時の間も——おり　国・⑧①心苦しくも恋しくも——恋しう心くるしうも　国・

第五類

⑧⓪しかく——しかくむつかり侍れは　国、陽・⑧⓪をあれ——あれ　国、陽・

⑧①みくしげどの——御みくしけとの　国、陽・⑧①事も——人も　国、陽・⑧①有様は——有様なと　国、陽・

資料　38　⑧②・⑧③

第一類

⑧②ならはし——ならし・

⑧③浅くしも——浅うしも・⑧③出でて往ぬる——出てぬる・⑧③程——人・

第二類

㉜顕れんと――顕れん　陽・㉜と思し――思し　国、陽・㉜出で給ふ――出て給て　国、陽・㉜畏まり喜ぶ――よここひ畏まる　陽・㉜昼――昼つかた　国・㉜出でたり――出てたまへり　国・㉜消息――消息の　国・㉜程は――程　国・

㉝奉りて――奉りはて　国、陽・㉝なほさて――なほさまて　国、陽・㉝待ちつけ――待ちとり　国、陽・㉝きこえさせん――きこえん　国、陽・㉝事の――事はいと　国・㉝ぬばかり――ぬはかりに　国・

第三類

㉝小君え――小君へ　陽・小君もえ　国・

第四類

㉜出づ――出て　国・㉜気色――さま　国・㉜はひまぎれ――はひまきれて　国・㉜わづらふ――わつらはる　陽・㉜ましたり――ましよれり　国・㉜遣水の――遣水　国・㉜めいぼく――めんほく　陽・㉜小君には――小君に　陽・㉜あけくれ――いまはうちにもたてまつりあけくれ　国・㉜まつはし――まとはし　陽・㉜召し――よひ　国・㉜女――女君　国・㉜思し――かくまておもほし　国・

㉝思ひ――おほし　陽・㉝うち解け人げなき有様を――人けなき有様をうちとけ　国・㉝小君が――小君　陽・㉝程――すこし程　国・㉝離れてを――離れて　国・㉝渡殿に――渡殿の　国・㉝中将――中将の君　国・㉝心――御心　国・㉝小君は――小君もえとみに　国・㉝もとめ――たつね国・㉝渡殿にわけ入りて――ナシ　国・㉝たどり――たつね　陽・㉝いと――いかに　陽・㉝浅ましく――浅ましう　陽・㉝かひなしと――かひなく　陽・

第五類

㉜いとほしく――いとほしう　国、陽・㉜給ひければ――給へれは　国、陽・

㉝往ぬる――まいりぬる　国、陽・㉝悩ましければ――悩ましきも　国、陽・

第六類

㉝など――ナシ陽・も　国・

資料　39　㉞・㉟

第一類

㉞誰も〳〵――たれ〳〵も・

㉟ぬれと――ぬれとて・

第二類

㉞定まりぬる――定まらぬ　国・㉞奉らは――奉らんは　国・㉞やあらまし――あはれにも思しられぬへき御ありさまを国・㉞胸痛く――うれたく　国・

㉟程を――程かな　国、陽・㉟なりぬれ――おもひなりぬれ　国・㉟いといとほしき――いとほしき　陽・㉟いたくうめきて――いたうめきて　陽・

第四類

㉞かく――いかにかくは　国・かう　陽・㉞心ばへは――心はへ　陽・㉞いみじく――いといみしう　国・㉞忌むなる――忌む　陽・㉞ときこえさせよ――ナシ　国・㉞うちには――いちは　陽・㉞いとかく――いとかう　陽・㉞たまさかに――たまさかにく　国・㉞あらまし――あらましと　陽・㉞思ひ知らぬ顔に見消つもいかに程知らぬやうに――思やうに　国・㉞思す――思ほす　陽・㉞かくても――かけても　陽・

㉟幼きを――幼きこそ　国・㉟後めたく――後めたう　陽・後めたけれと　国・㉟あさましく――あさましう　国・㉟心――御心　国・

第五類

⑧④ながらも――なから　国、陽・⑧④乱るとても――乱れと　国、陽・⑧④宿世――身の宿世　国、陽・

⑧⑤きこゆれば――きこゆれはまことにつらくて　国、陽・

資料　40　⑧⑤・⑧⑥・⑧⑦

第一類

⑧⑥果つまじく――果つましくて・⑧⑥籠められて――めくらして・

⑧⑦若く――いと・

第二類

⑧⑥いとほし――いといとほし　陽・

第三類

⑧⑥女はわび給ふ――女わひ給ふ　陽・

⑧⑦あはれによそへ思さる――あはれによそへ思す　陽・

第四類

⑧⑤心を――心も　陽・⑧⑤まどろま――まどろまれ　陽・

⑧⑥いとほしさ――いとほしき　陽・⑧⑥ねぶたく――ねむたく　陽・⑧⑥見る――思ふ　陽・⑧⑥すゞろに――ナシ　陽・⑧⑥すさまじく――すさましう　陽・⑧⑥と妬く――も妬う　陽・⑧⑥めざましく――めさましう　陽・⑧⑥どもさも――とえさも　陽・⑧⑥思し――思ひ　陽・⑧⑥まじく――ましう　陽・⑧⑥なほ――我　陽・⑧⑥な捨てそ――なうち捨てそ　陽・

⑧⑦なつかしき――うつくしき　陽・⑧⑦人――ナシ　陽・

（昭和60年10月30日）